
降臨せし異端の王

天童翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降臨せし異端の王

【Nコード】

N32860

【作者名】

天童翼

【あらすじ】

現代のオタクで・・・あれな少年が転生した世界は『ゼロの使い魔』の世界だった。しかし、そこに待っていたのは・・・ヴィヴィオ？アインハルト？何それ？どこの魔法少女？原作違うくない？まあ、可愛いからいいか。

しかし少年の思いとは違い『王』の意志は動きだす。

本編に入る前に

天童翼です。

また、やってしまいました。

まあ、ある意味、悪い病気です。

今回はゼロ魔×Vividです。

今回のキャラ案（アインハルト&ヴィヴィオ&オリヴィエ&クラウド）は、紅（元、朱）さんから、いただいたものです。

ですから、今回は私一人の力の作品ではありませんね。

シナリオとオリ主、能力などは、私独自のモノですが。

ちなみに、物語のシナリオのプロット上の都合により、私が紅さんの許可をもらって、少し書き換えさせていただきました。

ですから、〽魔眼と魔法と祝福と共に（仮）〽の方に朱さんが書いてくださったキャラとは、若干違います。そちらで、事前に見えて、知っていらっしゃる方は驚かないでくださいね。

せっかく紅さんから、いただいたアイディアなので、存分に発揮できるように頑張りたいと思っています。

ちなみに、原作ブレイク、原作崩壊などが一話目から、ありますので、苦手な方は、見ない方がいいと思います。

それでも構わないという方は、どうぞ。

あ、基本は毎月15日の一回更新ですが、感想などの方もよければ、よろしく願います。

ゆったりと見守ってもらえれば、幸いです。

P r o l o g u e (前書き)

今回は魔法少女リリカルなのは〜奏でる世界〜の100万PVの記念でもありますから、一人だけ登場してもらいます。

では、どうぞ。

Prologue

【IN??.?】

ある日の夕暮れ。

俺はバイトの帰りに、予約していた、ある物を受け取るために、ある店に行っていた。

何を買ったかというと、魔法少女リリカルなのはのファーストを映画化した物のDVD!!

俺はまだ、ブルーレイを見るための機材が家にないため、仕方なくDVDで我慢した。

それにしても、なのはシリーズは、人気すごいよな。

劇場にも見に行ったけど、さらにDVDまで買おうと思うクオリティの高さだもんな。

それに、なんと言っても、『あの』なのはとフェイトの空戦は男と
しては萌える！！

おっと、字を間違えた、燃えるだ！！

まあ、俺はなのは派だけだね。

なんと言っても顔が好き！！

しかし、フェイトの成長した胸も捨てがたい！！

さて、急いで家に帰って見るとするか。

明日も用事があるけど、今夜の内に三回は見ないとな。

それで、明日、同士と語らねばならない。

うん！！

なのは最高と！！

「お兄さん、危ない!!」

・
・
・
・
・
・
あ。

・
・
・
・
・
・
・
青信号で渡ってたのに。

・
・
・
・
・
・
・
・
車が突っ込んで来やがった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
俺、死んだな。

「ん？あれ？痛くない」

来るであろう衝撃が、一切なかった。

恐る恐る目を開けてみると、世界が止まっていた。

「危ない危ない。もう少しであなたを殺す所だったわ」

つか、世界の全てが止まってるんですけど。

「あら、驚いているの?」

「・・・・・・・・はい」

なんか目の前に、赤い瞳で黒髪のメツチャ綺麗なお姉さんがいる。

「まあ、いいわ。率直に言うけど、あなた今ので本来は死んでたわ」

「はあ」

まあ、トラックに引かれたら死ぬだろうな。

死ななかったけど。

「だから、この世界のあなたは死んだ♪OK?」

「・・・・・・・・まあ、はい」

「だから、あなたを転生させるわ」

「なんですと！！」

俺は綺麗なお姉さんに喰らいつく勢いで攻め寄った。

「キモイ♪」

デコピンで吹き飛ばされました。

「まあ、いいわ。こっちも仕事だし。早く『バグ』を転生させて、奏の様子でも見に帰りましょう」

「？」

何を言ってるんだ？

このお姉さん。

「ああ、そうそう、たぶん、転生したら忘れると思うけど、私の名前はアテネよ」

「・・・・・・・・・・はあ、俺は」

「名乗らなくていいわ。もうすぐ、別の世界で別の名前をもらうんだから」

「確かに」

俺は転生してしまうんだ。

あの、二次作なんかでよくある、夢の！！

「ああ、期待してもらってるところ悪いんだけどチートスキルはあげないわ」

「え〜〜〜〜〜！？」

「当たり前でしょ！！私はあなたの命を助けてあげた恩を返してもらったとしても、あなたに帰すべき恩はないわ！！」

「確かに・・・・・・・・・・」

「私にも時間がないの。だから、さっさとするわね。『転生プログラム』発動」

お姉さんがそう言うのと、俺は淡い光に包まれて行った。

ああ、出来ることなら、魔法少女リリカルなのはの世界に転生したいな〜〜。

まあ、そんなご都合主義で、思い通りになる世界があったなら、誰も苦労しないか。

しかし・・・・・・なのはのDVDだけでも次の世界に持っていけないかな？

あれはマジで見たかった（映画館でも見たけど）。

まあ、次の世界でも楽しい人生を送るか。

そんなことを思いながら、俺は完全に淡い光に包まれていった。

【END】

Episode 01 始まりと違う原作（前書き）

さて、本編です。

ヴィヴィオ&アインハルトの登場です。

Episode 01 始まりと違う原作

【INレン】

初めまして、レン・イグナイト・リ・クスタインです。

驚くことに転生者だったりします。

神様は記憶を無くすとか言ってたけど、私は全部覚えてるぜ!!

ちなみに、今はゼロの使い魔の世界に転生して、ゲルマニアの貴族の息子だったりします。

そして、私は現在6歳。

今まで何をしてたかって？

……それは言わない約束ですよ♪

父上と母上は元々商売人だったのが、商売に成功して、貴族の位を買ったくちなので、他の貴族からは舐められているため、仲の良い貴族などは、ほとんどいません。

唯一まともに接してくれるのが、お隣のゼーゲブレヒト家なのですが、あの家には現在進行形で悩まされています、それは後ほど。

それにしても、貴族ってやばいな！！

わずか、6歳の少年に専属メイドさん12人だぜ！！

前世ではメイドさんなんて、メイド喫茶でしか見たことなかったぜ！！

父上と母上は商売のため、領地を持っている癖に、領地経営は部下に任せています。

どこかで、商売しているんだと思うんだが、どこにいるか知りません。

多額のお金のみ毎月送って来ますが。

だから、私のことは部下とメイドさんに任せきりです。

父上、母上、親としてそれでいいのか？

まあ、精神年齢が実は高い私からしたら、まったく問題ないが。

「レン様、よろしいですか？」

私に話しかけてくれたのは、私の専属メイドの中では一番若いレインちゃんだ。

歳は14歳。

ハルゲニアには珍しい、黒い瞳、黒髪のポニーテールの美少女さんだ。

もちろん、白い肌でDカップはあるであろう巨乳！！

私のお気に入りナンバー1のメイドさんだ。

「どうしたの？」

普段は幼い子供のふりをしてるぜ。

「アインハルト様とヴィヴィオ様が遊びにおいでです」

「………私はいないと言って」

「しかし………」

「え？」

「なんで、レン君はそんなこと言うの！！」

「ひどいです。レン君」

レイナーレの後ろには小悪魔二人が降臨していました。

私にドシドシ近づいて来て、文句を言うのが、ヴィヴィオ・エルファ・ソル・グラン・リ・ゼーゲブレヒト、私の隣の領地のゼーゲブレヒト家の次女さんです。

それで、その……容姿が魔法少女リリカルなのはVividの主人公でお馴染のヴィヴィオさんのそっくりさんだったりします。

ヴィヴィオの後ろで私に控えめに文句を言うのが、アインハルト・エルファ・ソル・グラン・リ・ゼーゲブレヒト。

ゼーゲブレヒト家の長女にして、ヴィヴィオの双子の姉。

つまり長女さんです。

もちろん、こちらの容姿はアインハルトだったりします。

原作違うくね？

それに、この二人がゲルマニアにいる時点で原作ブレイクじゃねえか？

それも、なまじ、容姿、性格などが原作（魔法少女リリカルなのはVivid）と同じなので、余計に混乱中です。

あ、ちなみに、この二人の両親はあの『聖王』と『霸王』だったりします。

なんか、ぐちゃぐちゃすぎて、良く分からん。

しかし、調べてみた所、他の原作（魔法少女リリカルなのは）メンバーはいないみたいです。

なのはさんとか。

あの人の容姿とかは好きだけど、O☆H A☆N A☆S Iとか、怖いのでなくてよかった〜。

フェイトさんがいないのは残念だけど。

ちなみに、『聖王』と『霸王』、つまり、アインハルトとヴィヴィオの両親のことは後ほど。

「レン君、聞ってるの!？」

「はいはい、ヴィヴィオ。分かったから、それ以上近づくな」

ヴィヴィオの顔は勢い余って、俺の目の前まで来ています。

・・・前世で彼女すらいなかった、私からしたら、心臓のバクバクが止まりません。

Yes ロリータ No タッチの理論を前世で語っていた私ですから、例えば世界が変わっても、その信念は貫きたいのです!!

二人の中では私のことは『ただの』仲の良い友達らしく、このような、顔を近づけてくる行為を簡単にしてくるので、私の中で理性と欲望が常に戦っている状態です。

もう少し恥じらいを持ってくれば、付き合いやすいのに。

それが、現在の悩みです。

贅沢すぎる悩みですが、私の中では死活問題です。

「レン君!!」

さらに吐息のかかる距離まで、顔を近づけるヴィヴィオ。

拝啓、前世のお母様。

私は来世でも頑張っています。

しかし、私は、Yes ロリータ No タッチを貫けるのでしょ
うか？

願わくば見守っていてください。

レンより

「レン君、また、無視ですか？」

今度はアインハルトさんも怒っています。

だから、おまえも顔が近いつて！！

何時の間に、俺の前まで移動したんだよ！！

「クスッ」

レイナーレちゃんが、横で笑ってる。

助けてよ!!

「アインハルト様、ヴィヴィオ様、お菓子の準備ができております。レン様のことは後にしてくださいませんか？せっかくの紅茶が冷めてしまいます」

「は~~~~い」

二人仲良く返事をする二人。

ありがとうレイナーレちゃん。

「……………ヴィヴィオの方がレン君との顔距離が近かったいな」

ん？

アインハルトが何か呟いたような気がする。

声が小さすぎて、聞こえなかったけど。

それから、お菓子の用意ができている、部屋まで向かう。

「あゝゝゝ今日は苺のタルトだゝゝゝ」

並べられているタルトを見て、はしゃぐ、ヴィヴィオ。

あゝゝゝかわええな。

は！？

いかん、Yes ロリータ No タッチ Yes ロリータ
O タッチ Yes ロリータ No タッチ！！
N

「美味しそうです。苺」

アインハルト！？

よだれ垂れてる？

ほんの少しだけどー！！

萌える！！

は！？

まただ！！

彼女達は、まだ6歳だ！！

Yes ロリータ No タッチ Yes ロリータ No タッ
チ Yes ロリータ No タッチ Yes ロリータ No
タッチ！！

（注意・レンも6歳です）

「さ、レン様も座ってください。アインハルト様とヴィヴィオ様が、我慢できないみたいですよ♪」

あ!?

二人ともジト目で私のこと見てる。

急がねば!!

私は急いで、席に座る。

そして、おやつタイムが始まる。

「美味しいね、お姉ちゃん」

「はい、そうですね。あ、ヴィヴィオさん、頬っぺたにクリームがついてますよ、ペロ」

「キャツ、お姉ちゃん、くすぐったいよ」

「…………仲良きことは美しきかな…………アインハルトがヴィヴィオの頬っぺたについたクリームを舐めてあげても、姉妹だから、百合じゃない、百合じゃない!!」

「ハウ~~~~美味しかった」

「御馳走さまです」

は、しまった!?

アインハルトとヴィヴィオのことを考えてたら、二人共食べ終わってる!?

私は急いで、苺のタルトをほおぼる。

あ、マジで旨い。

「ヴィヴィオ、アインハルト、食べたなら、もう帰れよ。遅くなる
と、オリヴィエさんも心配するだろ?」

てか、精神的にしんどいです。

「え~~~~、まだレン君と遊んでないから嫌~~~~」

「大丈夫ですよ、ヴィヴィオさん、お母さんには、少し遅くなると伝えていきます」

「やった!! レン君、何して遊ぶ!？」

「いや、だから……」

「「レン君は私達と遊びたくないの?」」

「遊びたいです!!」

アインハルト&ヴィヴィオの涙目+上目づかいで一氣に俺は承諾してしまった。

うん、女の子は正義です。

「じゃあ、何する? レン君、お姉ちゃん?」

「うーん、おままごとはダメですか?」

「俺の家じゃあ、道具が何もないからな」

嘘です。

ただ、精神的に辛いからです。

「うゝゝん、それじゃあ、お外で、おにごっこー!」

「私もそれがいいです」

「そうだな。レイナーレちゃん、私達は庭でおにごっこしてくるよ」

「かしこまりました。私は食器をかたずけたら向かいます」

「うん、じゃあ、アインハルト、ヴィヴィオ、行こうか」

「うん♪」「はい♪」

三人で庭まで、走り出す。

○ ○ ○

「はあはあはあ」

「レン君、早く!!」

「レン君、だらしないですよ!!」

あれから、約二時間半、おにごっこを続けています。

私が体力だけなのか？

もう、そろそろ、マジで限界です。

もう、歩くだけでもしんどいです。

その時だった。

私の後ろから、聞いたことのある声がした。

「アインハルト、ヴィヴィオ、そろそろ帰りますよ」

「「あ、お母さん!!」」

声の先にはヴィヴィオと同じ金色の髪と赤と薄翠の虹彩異色の瞳の綺麗なお姉さんが立っていた。

この人がアインハルトとヴィヴィオの母親のオリヴィエ・エルファ・ソル・グラン・リ・ゼーゲブレヒトさん。

魔法少女リリカルなのはViViDに出てくる、『聖王オリヴィエ』の肖像の人と、まったく同じ容姿です。

童顔で23歳の二児の母にはまるで見えません。

「レン君、娘達と遊んでくださってありがとうございますね」

「いえ、私も楽しかったですか——」

「「違うよ、私達がレン君と遊んであげてたの!!」」

「はいはい、分かりました。レン君、私達はこれで失礼するわね」

「レン君!! また、明日!!」 「さようなら、レン君」

オリヴィエさんと手を繋いで迎えに来た馬車に乗る三人。

ふう、オリヴィエさんのおかげで、助かったな。

そうそう、この屋敷から、ゼーゲブレヒト家までの時間は馬車でだいたい二十分の所です。

まあ、前世の記憶のある私からしたら、なんて時間がかかるんだ!?

とも思うが、この世界の化学レベルを考えると、これが限界なのだろう。

それにしても、今日もアインハルトとヴィヴィオ可愛かったな〜

）。

レイナーレちゃんに話しかけられるまで、妄想していた私だった。

【END】

E p i s o d e 0 1 始まりと違う原作（後書き）

感想お待ちしております♪

ちなみに、オッドアイは、ハルゲニアでは、災厄を呼ぶ的な悪いモノとしてみられています、そのあたりもきちんと考えていますので。

E p i s o d e 0 2 始まりの異端（前書き）

毎月15日更新から不定期更新に変更しました。

色々と考えてのことですが更新は基本遅くなると思いますので、温かい目で見守っていただけますようお願いいたします。

後、今回より本格的にガンガン題名の異端にかかわっていく予定です
すからギャグは少なめになる予定です。

それに伴って文章の書き方を少し変更いたします。

感想、ご意見などは書きこんでいただけると嬉しいです。

Episode 02 始まりの異端

「レン君、いつも娘達と仲良くしてくれてありがとうね」

「いえいえ、私も二人と遊ぶのは楽しいですから」

お礼を言ったのはヴィヴィオとアインハルトの母であるオリヴィエだった。

「ふふ、それなら良かった」

いつもならば、ヴィヴィオとアインハルトが遊びに来る時間より一時間ばかり早い時間にオリヴィエはレンの所を訪ねて来ていた。

それを不審に思いつつもオリヴィエと親しげに話すレン。

しかし、その表情はオリヴィエが言った一言によって凍りついた。

「私が明日から魔法の訓練をしてあげますからね」

「はあ!？」

「ですからアインハルトとヴィヴィオ達と一緒にあなたにも、魔法の修行をつけてあります」

「……まったく理由が分からないんですが」

「それはですね——」

そこでレンとオリヴィエが話していた部屋の扉が勢いよく開けられる。

「「お母さん!!」」

二人の女の子が息を切らしながら叫んだ。

「あら、二人共どうしたの？」

自分の娘を見ても何も動じないその姿はまさに百戦錬磨の騎士を思わせる。

「なんで私達を置いて、レン君に会いに行くなんてズルイです!!」

「お姉ちゃんの言う通りだよ!! お母さんズルイ!!」

走って来たせいかな顔は少し赤くなっており頬を膨らませている。

「あらあら、私にやきもちを焼いてどうするの? 確かにレン君はカッコいいけど私にはクラウドがいるから取らないわよ」

「うゝゝゝ」

二人は顔を真っ赤にして下を向いてモジモジします。

その光景をオリヴィエは微笑ましいというような慈悲深い顔で見ているがレンにとっては、それどころではなかった。

彼はなぜ、自分の魔法の練習が再開されたのかを疑問に思うことで頭がいっぱいだった。

「それではさっきの話の続きをしましょう」

「・・・・・・・・」

「レン君、聞いていますか？」

そうオリヴィエに名前を呼ばれて突然、気がついたみたいに顔をあげるレン。

「あ、はい。すみません」

「いえいえ、いきなりのもで混乱するのも無理はないです」

「あ、アインハルトとヴィヴィオ来てたのか。そんな所で立ってないで座りなよ」

「「っ!?!あ、うん!!」」

それを聞いて二人はモジモジするのをやめてレンの両隣に座る。

「ふふ、そう言われて私の隣にではなくレン君の隣に座るなんて・・・少し母親として嫉妬してしまいますよ、レン君」

「え？」

レンにとってはこれが当たり前の状況なのでこれを指摘されても、
いまいちピンとこないレンだったが

（そういえば、なんでだろ？初めの頃は恥ずかしくて仕方なかった
けど慣れればどうってことないから考えたことなかったけど・・・
まあ、可愛いから全て許す！！）

と、勝手に自己完結したレンだった。

「さてと、私も暇ではないので本題に入らせてもらいますが実はで
すね。レン君のご両親に頼まれたのです」

「母さんと父さんに？」

「ええ。お二人はレン君が魔法には必ず魔法の才があるから私に頼
まれて欲しいと」

それを聞いて何も答えないレン。

レンは五歳の時に杖と契約して以来魔法を使っていない。

コモンマジックは普通に使えたし属性魔法も、なぜか全て使えた。

それを見た周りは神童だと祭り上げた。

しかし現実是非常なモノでレンは全属性の系統魔法を使えたが全てドットまでしか使えない。

タスことができなかったのだ。

だからクラスは神童の割に一年経ってもラインにならない、つまり神童とは何かの間違いだと言うことになったのだ。

「……………話しはありますが、お断りさせていただきます」

「……………そうですか分かりました。気が変わったら私達の屋敷に来てくださいね」

そう言って退出するオリヴィエ。

その後ろ姿をレンは苦虫を噛み潰したような顔を見ながら見送った。

「レン君・・・」

両隣のアインハルトとヴィヴィオはそんなレンを心配したように見守った。

「ごめん、暗かったね。お菓子食べに行こ」

「うん♪」

レンは多少無理をしながらも二人をお菓子を用意してもらっている食堂へと向かうのだった。

○ ○ ○

あれからレン達はまたいつものように遊んでいた。

すると、何を思ったのかヴィヴィオが

「レン君!! 森に行こうよ!!」

ヒマワリが咲いたような笑顔で言った。

不覚にもレンはその笑顔に目を奪われてしまった。

「……うん、いいよ」

「ダメです!! 森は危険がいっぱいあるんです!!」

それに反対したのはアインハルトだった。

「え〜〜アインハルトお姉ちゃん、お願い」

「ダメなモノはダメです!!」

ヴィヴィオとアインハルトが言い争いを始めた。

「「うううう!!」」

（二人共可愛いな・・・でもきつと、ヴィヴィオは魔法のことで落ち込んでいる俺を慰めたいんだな）

レンは何かを決意したような顔でレイナーレを呼ぶ。

「なんですか？レン様」

「うん、少し森に行きたいんだけど」

「あのクスタイン領とゼーゲブレヒト領の間にある森のことですか？」

「ああ」

「レン君!! 私には行かないでおうって言ってるよね!!」

アインハルトが悲しそうな顔をして叫ぶ。

それとは対照的にヴィヴィオは勝ち誇った笑みを浮かべながら、レ
ンの後に続く。

「ダメですか？ レイナーレさん！！」

「そうですね・・・」

レイナーレはヴィヴィオの瞳を見て何かを悟ったような顔をした。

「分かりました。それなら護衛をつけますから行っても構いません。
ただし遅くならないようにしてくださいよ。オリヴィエさんには私
が手紙で知らせておきます」

「ありがとう！！ レイナーレさん！！」

レイナーレに飛びつくヴィヴィオ。

レイナーレは少しだけ頬を赤らめて、コホンと咳払いした。

「ヴィヴィオ様、私のことより早く森に行かないと時間がなくなっ

てしまいますよ」

「うん!! レン君行こ!!」

ヴィヴィオは相変わらずニコニコだが、自分の意見が聞いてもらえなかったアインハルトはご機嫌斜めだった。

しかし、それはヴィヴィオがアインハルトに

「お姉ちゃん、……………ゴニョゴニョゴニョ」

「っ!?!」

ヴィヴィオに何か耳元で言われた途端にアインハルトは目を見開き。

「レン君、行きますよ!!」

突然行く気になった。

「あ、ああ」

その変貌ぶりにレンは驚くしかなかった。

ヴィヴィオが六歳とは思えない悪戯好きな女の人の顔をしていたが、この場にいた者は誰も気づかなかった。

「……ふふ、計画通り」

○
○
○

レン、アインハルト、ヴィヴィオは森へ行くために馬車に揺られること約三十分。

クスタイン領とゼーゲブレヒト領の境にある豊かな森に来ていた。

この日のように晴れた日には木々の間から零れる太陽の光が幻想的に見える。

しかし、アインハルトとヴィヴィオの瞳にはただ綺麗な光にしか思わなかった。

ただ・・・レンだけは違った。

彼は仮にも前世の記憶があるため精神年齢が既にオッサンであるため、まったく別のことを考えていた。

（この森は何かおかしい。前来た時も思ったけど・・・・・・・・）

しかし、そのおかしい内容までは分からずに、ついつい考え込んでしまったため、両隣にいる小悪魔達は頬を膨らませた。

「レン君、私達のことをほっとかないでください!!」

「そうだよ、レン君!! 私達がいるのに他のこと考えるの禁止!!」

「あ、ごめん・・・・・・・・」

素直に謝るレンだったが、なおもレンの視線が森から離れないため二人の機嫌は直らなかった。

「そもそも、レン君はですね。優柔不断だと思います」

「そうだ、そうだ、お姉ちゃんもって言ってやれ!!」

ヴィヴィオの応援によって饒舌になったアインハルトはさらにレンに説教を続ける。

そのアインハルトの表情は心なしか嬉しそうに見える。

「レン君は私達のことをもっと大切にするべきなんです!! いくら勉強に忙しいからって週に遊んでくれるのが五日というのが気に入りません」

「そうだ、そうだ!!」

「私達は毎日レン君に会いたいです!!」

「そうだ、そうだ!!」

「それとなんで私達が近寄ると避けるんですか!? 私達はおつとレ

ン君とスキュ、スキンシップをとりたいんです!!」

「そうだ、そうだ!!」

「聞いてますか、レン君!!」

「そうだ、そうだ!!」

それに返事をしないレン。

レンの視線は未だに森に注がれたままだった。

それを見たアインハルトはさらに説教?を続けるがレンは一切聞いていた様子はない。

そんなことをしている間に森の入口に着いたため馬車が止まる。

「レン様、アインハルト様、ヴィヴィオ様、到着しました」

そう告げたのは今回の遊びの間の護衛を任されている護衛の主任だった。

「「ありがとお〜〜!!」」

二人の小悪魔の返事に心なしか護衛の主任の顔が綻ぶ。

「「レン君行くよ!!」」

二人がレンの手を取った所で

「あ、着いたの、ごめんボーとしちゃった」

レンが返事をした。

「もう、今までの私の話し聞いてなかったですね」

「にやはは。残念だねお姉ちゃん」

「え?」

怒るアインハルト、苦笑するヴィヴィオ、頭にクエッションマーク

を浮かべるレン、モジモジしている警備主任、最後の男のみがキモかったのは言うまでもない。

「そ・ん・なことより、早く遊びに行こ!!」

ヴィヴィオがさらにレンの手を握る力を強めて走り出す。

「うわぁ!?!」

「きゃあ!?!」

驚いて悲鳴を上げるレンとアインハルト。

しかし、そんな二人を無視して森の方へ走るヴィヴィオ。

その顔にレンが見とれていたのは内緒だった。

森の中は外で見るよりも、さらに幻想的な空間が広がっていた。

綺麗な鳴き声をはなちながら戯れる小鳥。

爽やかで暖かい風があたりを吹き抜け、それに煽られて少しだけ傾く花。

レンだけでなくアインハルトとヴィヴィオまでもが、森の幻想的な雰囲気に見とれてしまっていた。

「・・・・・・・・綺麗」

そう最初に口を開いたのはヴィヴィオだった。

「ああ」

「そうですね」

返事をする二人も心ここにあらずと言ったような感じだった。

「・・・・・・・・あー!! そんなことより、早く遊ばないと時間なくなっちゃうよー!!」

またも口を開いたのはヴィヴィオだった。

「あ、そうです!!」

アインハルトもそれに同調する。

「ほら、レン君、遊ぼ?」

ヴィヴィオが上目ずかいでレンを見つめる。

(ぐわぁ・・・Yes ロリータ No タッチ Yes ロリー
タ No タッチ Yes ロリータ No タッチ!! Yes
ロリータ No タッチ Yes ロリータ No タッチ Ye
s ロリータ No タッチ!! て痛っ!?)

ヴィヴィオの仕草に一気に理性が崩壊しかけたレンだったがアインハルトが、レンのお腹をつねったため正気に戻れた。

「・・・・・・・・チツ・・・・ほら、レン君、お姉ちゃん行こ!!」

「行こうか」

「「うん♪」」

三人は花を摘んで花で輪っかを作ったり、木の実を拾ったり森でしかできないことをして遊んだ。

レンが終始、顔を真っ赤にしていたが概ね平和な森での遊びだった。

「レン様、そろそろ帰る時間ですよ」

三人を呼びに来たのは剣を腰に携えた警備隊の主任だった。

「あ、はい。アインハルト、ヴィヴィオ帰るよ」

「はい」

「ええ……もうちょっと!!」

対称的な反応をする少女二人。

しかし、この二人の顔が次の瞬間驚愕に染まった。

警備隊の主任とレンは同時に首を傾げて、お互いの顔を見合った。

「どうしたの、アインハルト、ヴィヴィオ？」

レンが二人にさらに聞くも二人は首を振るだけで何も答えない。

「・・・・・・・・しろ・・・・」

「え？」

「・・・・・・・・後ろ！！」

次の瞬間、警備の主任が吹き飛ばされて木にぶつかった。

レンが振り返った先には身長2メートルほどの豚の顔に肥満な肉体を持つ亜人がそこに五体もいた。

「・・・・・・・・オーク鬼！？」

レンは咄嗟にそう叫んでしまった。

「……………お逃げください」

それだけ呟くと警備主任の男は倒れて気を失ってしまった。

「「きゃあああああああああああ」」

二人の少女の悲鳴が響きわたった。

その悲鳴をものもしない余裕の表情をオーク鬼は見せる。

オーク鬼は手だれの戦士五人分の戦闘力を持つとされていて、さらに人を喰らうことでも有名だ。

その二人の悲鳴を聞いた後のレンの行動は素早かった。

震える足を殴って震えを止めた後、急いでアインハルトとヴィヴィオの手を掴むと森の奥の方に走り出した。

その見事な判断は一瞬だがオーク鬼に判断を遅らせた。

我に返ったオーク鬼は獲物が逃げて事が分かると全員でレン達を追い始めた。

いくら手だれの戦士五人分の力を持っていたてもオーク鬼はあまり頭は賢くなかった。

だから、警備主任はオーク鬼に喰われることは先送りにされた。

「はあはあ」

「レン君・・・・・・・・ちょっと早いよ」

レンは無言で全力で走った。

いつもアインハルトとヴィヴィオと鬼ごっこしている時には考えられない速度で。

今回は本当に捕まれば鬼に喰われるかもしれない本当の鬼ごっこ。

生命の危機がレンの脳のリミッターを外していたのかもしれない。

子供とは思えない速度で二人の手を引っ張りながら逃げるレン。

しかし・・・現実残酷だった。

例えば子供の能力の限界を超えていても、それはあくまで子供の力。

手だれの戦士の五人分の力を持つオーク鬼には、少しづつだが距離を縮められている。

それがさらにレンを焦らせる。

「守らなきゃ、守らなきゃ、私が」

幼い日々より遊んで来た二人の少女。

自分が転生者であることを隠して付き合っているとはいえ、第二の両親にあまり相手にされないレンにとって二人は友達であり、兄妹であり、家族だった。

そんな二人を守れない自分がとても悔しくて、一滴の涙が流れる。

（なんだよ！！転生者なのに何も特別な力を持たない私は大事な二人すら守れないのか！！）

どんどん、レンの思考はネガティブな方向へ向かう。

（私はどうなってもいい。神様・・・始祖様なんでも良い！！二人を救ってくれ！！）

「・・・はあ・・・はあはあ・・・もうダメ」

ヴィヴィオが何かにつまづいて倒れてしまった。

「ヴィヴィオ！！」

アインハルトが震える足で倒れたヴィヴィオに近寄り、オーク鬼との間に入る。

「大丈夫・・・お姉ちゃんを守るから・・・ヴィヴィオも・・・レン君も」

涙を流しながら震える足でオーク鬼の間に立つ姿は小さな勇者そのものだった。

それをレンも涙を流しながら呆然と見ていた。

（何だこれは……私は何もできないのか？）

さっきまでは異常と言うまでに動いた足が今度はビクとも動かない。

（どれだけ精神年齢が高くても私はヘタレでビビりだから何もできないのか？）

オーク鬼はヴィヴィオが倒れたのを見て走るのをやめて、ゆっくりと三人に近づいて来る。

「……レン君？」

二人の前に涙でクチャクチャの顔のレンが立つ。

「大丈夫、大丈夫だから……私が守るから……命に代えても守るから……それだけは……」

レンは懷から一本の杖を取り出す。

無駄な装飾は一切されていない実戦用の杖。

あの日。

神童から落ちこぼれまで転落したあの日から魔法など一回も使っていない。

両親も今日まで魔法を使わないことに何も言ってこなかった。

魔法は使わなくても、なぜかいつも持ち歩いていた魔法の杖。

理由は第二の両親が初めて自分にくれたモノだったからかもしれない。

だけど、そんな理由は今どうでも良い。

レンは涙で焦点の合わない目を擦りながら、杖をオーク鬼に向ける。

「アースハンド!!」

土でできた巨大な腕が五体のオーク鬼を掴む。

オーク鬼は初め驚いたものの、すぐにそれが脅威でないと分かるとニヤと笑って腕の力でアースハンドを破壊して、また歩いてこちらに向かって来る。

「アースハンド!!」

また、土の腕でオーク鬼を捕まえるが今度は何もなかったかのように壊された。

「エアーハンマー!!」

今度は空気の塊を放つが………オーク鬼に当たっても何もなかった。

オーク鬼にとってレンの放ったエアーハンマーは何のダメージも与えられなかったのだ。

「エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!! エアーハンマー!!」

何度も放つがまったく言っていないほど、オーク鬼に対してダメー
ジはなかった。

（そうだな、そんな上手いくほど現実には甘くないよな）

レンは止めどなく出てくる涙をぬぐって意識をしっかりと持つ。

魔法を使う手を一切緩めずに言葉を放つ。

「・・・・・・・・・・・・俺は二人が嫌いだった・・・・・・・・」

「「え？」」

レンは二人に語りかける。

「お前達なんて嫌いだ。俺の家にお菓子を毎日のように食べにくる
し・・・・・・・・遊ぶのも女の子の遊びばかりだから楽しくない・・
・・」

オーク鬼に対峙しながら後ろの二人に語り続ける。

「…………だから、おまえ等なんて嫌いだ…………だから…………俺の前から消えろ……………」

「何言ってるのレン君？」

ヴィヴィオが強ばった声でそう聞いてくる。

「俺は始めからおまえ等、姉妹が嫌いなんだ！！だから、もう見たくないんだ！！さっさと森の奥に行け！！」

そう高らかに叫ぶ。

次の瞬間にレンの背中に暖かな二つの温もりがレンを包む。

「知ってたよ……………」

「レン君が優しいこと……………」

「私の我がままを聞いてくれるところ」

「私とヴィヴィオのお菓子を毎日、考えてくれていること」

「いつも、ヴィヴィオ達と嫌な顔一つせずに遊んでくれたこと」

「いつの間にか、寝てしまった私達に毛布をかけてくれたこと」

「「レン君が優しいということを私達は知ってるよ。だから、レン君一人にさせないよ」」

レンは涙の滴と共に唯一の武器だった杖を落としてしまった。

その杖がヴィヴィオのつまずいた石に当たる。

すると、綺麗な光を放ちレンを包みこんだ。

光はみるみる大きくなり世界は真っ白な空間になった。

そして、声が聞こえてくる。

『器よ』

『私達の声が聞こえますか？』

「・・・・・・・・なんだ？」

『聞こえているなら聞け』

『僕達の器よ』

『力が欲しいなら与えましょう』

『我らの器になるのなら』

『我らの器』

「・・・・力をくれるのならくれ！！あんた達がなんであろうと二人を守る力を今くれるなら！！」

『『『よかろう、我らが器、異端の王よ』』』

Episode 3 始まりは土の王

【IN ヴィヴィオ】

オーク鬼に追われてレン君があからさまに私達を逃がすために酷いことを言いました。

それを聞いた私とお姉ちゃんは咄嗟にレン君に抱きついていった。

そしてお姉ちゃんと一緒にレン君に抱きついた時だった。

光が起きた。

一瞬だけ暖かな光がレン君を包んだ。

何があったのか私には分からないでもレン君が放つ気配がなんとなく変わったような気がした。

それが何か分からないから漠然とだけど……なぜかそんな気がした。

後ろを振り返ったレン君の顔は涙でグチャグチャなのは変わらないけど

「アインハルト、ヴィヴィオ、ありがとう」

とっても優しい笑顔を私達に向けてくれた。

この時、私は命の危険にさらされているのにドキッとしてしまったのは内緒だ。

「守るから………二人を」

そう言うのと、またレン君を暖かな光が包み込んだ。

しかし、さっきと違うのはその光が茶色の光だった。

私とお姉ちゃんは驚いてレン君から離れてしまった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

レン君が叫び声を上げた。

レン君が叫んだのなんて初めて聞いた私達はそのことにも驚いてしまった。

そして、完全にレン君を茶色の光が包み込んで見えなくなってしまった。

本当ならお姉ちゃんも私もレン君の身に何が起きたか分からないから焦る所だけど、あまりにも暖かい光のためか、不安はなかった。

「お姉ちゃん・・・」

「うん、レン君を信じよう」

「うん」

そんなやりとりをしている間に私達とオーク鬼の距離は5メートルを切っていた。

オーク鬼が4メートルを越えようとした時だった。

『器は望んだ力を』

茶色の光の中から声が・・・レン君ではない誰かの声が聞こえて来た。

『我は不動の力を持つ大地、大いなる力を持つ』

まるで・・・大人の男の人みたいな声。

『我が力を望む器のため、我のため我は再びこの世界に顕現する』

その声を聞いて急に不安になってしまう。

レン君は・・・？

『世界よ、称えよ!! 我は土の王!!』

茶色の光は次第に収まっていった。

【END】

『世界よ、称えよ!! 我は土の王』

その声が響いた時レンを包んでいた茶色の光が収まる。

「レン君!!」

アインハルトとヴィヴィオがレンの名前を同時に呼ぶ。

「「っ!?!」」

レンが帰って来たと思い歓喜した二人は、その突然の出来事に体を堅くした。

・・・そこに立っていたのはレンではなかったからだ。

「久しぶりの現世か・・・懐かしいな」

そう口にしたのは十代後半であろう少し筋肉質な茶色の肌を持ち身長180メートルを超えるであろう大男だった。

「・・・あなたは誰ですか？」

アインハルトはオーク鬼が迫って来ているというのにそれを気にもかけずに大男に質問した。

「ほう・・・小さいな、もしかして器もお前達と同じ歳なのか？・・・いや待てよ・・・それなら俺をガキが呼び出したてのか？」

アインハルトを見て何か独り言を言う大男。

その時だった。

今まで散々無視されたオーク鬼の内の二匹が叫び声を上げた。

「ほう・・・とりあえず状況は分かった。色々あるが今はそれよりも早く終わらせないと。お嬢さん方失礼するよ」

そう言うとお大男は手を地面にかざす。

すると、アインハルトとヴィヴィオの周りの土が急に盛り上がりまるでドームを作るかのようにして土の防御壁を作りだし始めた。

「きゃあ!？」

突然の出来事に悲鳴を上げるヴィヴィオ。

「お嬢ちゃん、大丈夫だ。それは特別製でね外と遮断するが小さな穴があいているから光はきちんとドームの中に届く。それに小さな穴があいているから息もきちんとしてできる。安心して隠れてな」

「レン君をどうしたんです!？」

大男の言葉を気にもしないでアインハルトは叫んだ。

「ああ？器のことか？大丈夫だ。それよりも今はお嬢ちゃん達を庇いながら戦うのはチト骨が折れるから大人しくそこにいてくれ。こいつ等を倒したらレンとやらに会わせてやる」

大男はオーク鬼の方を指さしながらそう言った。

「・・・・・・・・分かりました・・・・絶対ですよ」

渋々といった感じでアインハルトは了承する。

確かにまずは、オーク鬼から生き伸びるのが今の最優先事項だ。

例え今レンが帰って来てもオーク鬼にすぐに殺されてしまうだけなのを子供ながらにアインハルトは分かったのだ。

「良い子だ・・・・・・・・さあ、始めようか」

土のドームが完成したのを見ると大男はオーク鬼と向き合う。

「おうおう、鬼が我にビビってるのか？まあ、仕方ないか。我の方が遙かにお主らより強いからな・・・それにお主らは我らが器を殺そうとしたそれだけでも死に値する」

大男に向かってオーク鬼が棍棒を投げる。

それは2メートルほどの大きく太い棍棒だったが、まるで普通の棒を人間が投げたのと同じくらいの速さで大男に迫る。

「我を傷つけるなどお主らに不可能だ」

大男が手を正面にかざすと地面から大きな壁が突然現れてオーク鬼の棍棒を防ぐ。

そしてまた、土に帰って行く。

「本来なら貴様らのような奴に名を名乗らんが今から殺す貴様らに敬意を払って名を名のろう我が名は『ドラフト』。偉大なる『土の王』じゃ」

ドラフトがそう言い終わるとドラフトの背後にさっきと同じように土壁が現れる。

「錬金」

ドラフトが呟くと、背後の壁から大量の長剣が突然現れて五匹のオーク鬼に向かって飛んで行く。

長剣の長さは2メートルもある剣だった。

初めは避けれていたものの、長剣の数はドンドン増えていき次々とオーク鬼の体に刺さる。

その度に声を上げる姿は何とも言えないものだった。

「こんな光景あのお嬢さん方には見せれないからの」

ドラフトがそう呟いている間も剣が止まることはなかった。

【INオリヴィエ】

「そうですか、分かりました。では搜索してみます」

「ありがとうございます」

私はレン君の屋敷を訪ねた後、領内の視察のために私は村を訪問している時でした。

領内のある村の村長が村の近くでオーク鬼が出たので討伐を依頼されました。

我が領内には盗賊や亜人が入って来るのは稀なのですが出たと言うなら、領民に迷惑をかけないと約束させるか討伐しないといけない。

人間側の勝手な都合とは分かっているのですが、そうしないと力を持たない領民が一方的に蹂躪されてしまうので仕方ありません。

それから、私達はオーク鬼の対応のために情報を集め初めると、なんでも私達の屋敷の近くの森に移動したようなのです。

屋敷にはクラウドがいますから問題ないのですがアインハルトとヴィイオが乗る馬車を襲撃されてはいけないので私は急いで森へと向かいます。

森の入口に着くと見覚えのある馬車が止まっていました。

あれは・・・クスタイン家の馬車、もしや私達よりも先に気づいて行動を起こしてくれたのでしょうか。

事情を聞くべく馬車を降りて近づいて行くと馬車の護衛をしていた人に驚かれた。

「オリヴィエ様、どうされたのですか？」

「はい。私もオーク鬼の討伐を手伝おうと思ひまして」

「はあ？」

警備の人は分かっていないようだ。

「オーク鬼が、このあたりに潜伏していると聞いて討伐に来たのではないのですか？」

「え！？我々はレン様とアインハルト様とヴィヴィオ様の護衛で」

「何ですって！？まさか三人は今、森にいるのですか！？」

「はい。今、主任が呼びに行かれた所です」

その時、

「「きゃあああああああああああああ」

と叫び声が聞こえてくる。

この場にいる全員に緊張が走る。

今の悲鳴はアインハルトとヴィヴィオの叫び声だ。

私は周りの警備の者たちよりも先に、悲鳴のした方に走り出す。

「間に合え」

私の願いを口にしながら。

三人が遊ぶとすれば森の入口の付近のはず、たぶん昔家族でピクニックで行った花畑の可能性が高いはず。

そこには、木に倒れるような形で一人の男が倒れていた。

この男は……よく見るとクスタイン家の家紋のついた鎧を着ている。

ここで当たりなのだろう。

その時だった後ろから微かだが殺気が。

振り返ってみるとそこにはオーク鬼が三体立っていた。

「私は争うつもりはありません、話を聞いてください」

次の瞬間、オーク鬼は棍棒をこっちに投げて来た。

私はそれを紙一重で避けて、さらに言葉を続けます。

「私は話しがしたいのです!!」

今度は別のオーク鬼が棍棒を投げて来た。

「分かりました・・・そちらに話しをする気がないのなら・・・」

私は拳をつくりオーク鬼へと対峙します。

私が今使っている構えはストライクアーツ。

私が長年かけてつくりあげた近接戦闘術に長けた流派。

拳を放つ時に杖は邪魔になるので指輪を代用品として使っている。

まだ、棍棒を投げていなかったオーク鬼が先行して私に突っ込んで来ます。

オーク鬼は棍棒を普通に上に振り上げて私めがけて振り下ろして来る。

私はそれを紙一重で交わしてオーク鬼の左横に入り込む。

そして、私は我がゼーゲブレヒト家に伝わる虹色の炎を左の拳に纏わせてオーク鬼の横腹に叩き込む。

「フレイムアクセル!!」

ただの左ストレートなのですが、虹の炎によって何十倍にも強化されていた私の拳を受けてオーク鬼は一瞬だけ宙に浮き、地面に落下した時には気絶していた。

これで一体。

私は残り二体のオーク鬼の様子を見ます。

やはり、さすがに動揺しているようですがそれほど目立って隙ができたわけではありません。

それなら私は足に虹色の炎を纏わせて脚力を強化して一気に二体のオーク鬼の所へ接近する。

そしてそのまま一体のオーク鬼の首めがけて回し蹴りを放つ。

その蹴りもなんなくオーク鬼にあたり、そのまま横に吹っ飛ぶ。

そしてそのままの勢いでもう一体のオーク鬼の顔面に裏拳を叩き込む。

もとろん虹の炎で強化して。

ふう、終わった。

「オリヴィエ様!!」

その時、五人の警備の男達がここまでやって来た。

「あそこにあなた達の主任が倒れています。怪我の治療を私は引き続き三人の搜索をします」

「は、はい。分かりました」

そして私はまた駆け出す。

さっきの三体で全員だといいいのですが……。

三人を探す私ですが、なかなか見つかりません。

焦っても意味がないと分かっているのに気持ちは焦るばかりで、さらに思考が嫌な方向ばかりに行く。

そんな時だった。

オーク鬼の叫びが聞こえて来る。

私はその叫びが聞こえて来た方に無意識のうちに駆け出した。

そこには……五体のオーク鬼が何十本もの長剣で貫かれ死んでいる無残な姿だった。

「これは……」

「来たか人間」

驚いている私に声変わりした男の声が聞こえて来た。

振り向いてみると、そこには筋肉質なお大男が立っていた。

・・・この男、相当強い。

「貴様は少女達の知り合いか？」

「はあ？」

「銀髪と金髪の少女のことだ」

「はい、私の娘です」

「そうか、二人はあのドームに保護している。こんな状態を見せられなかったものでな」

「あなたは誰なのですか？」

「そう慌てるな『聖王』の二つ名の継承者よ。我が名は『ドラフト』後は自ら調べるといい」

「っ！？なぜ私の二つ名を！？」

「それも、私の正体が分かれば分かる。それよりも今は、こいつ等の埋葬だ」

ドラフトが手をかざすと、地面が割れていき大きな穴ができる。

そしてオーク鬼を一体一体抱えて、その穴に入れていく。

「私の勝手に殺してしまっただけなんだが、安らかに眠れ」

「……………殺したのですか？」

「殺していなければ、我が器と貴様の二人の娘が殺されていた」

「……………それを言われると何も言えない。」

「ああ、そうそう聖王」

「なんですか？」

「そろそろ器の魔力がなくなる。後は頼む。それにしても、この歳ですでにそのあたりの大人よりも凄い量の魔力を得ているようだが、その力に振り回されている感じがしてならん。次、我を顕現させる時にはもう少し鍛錬してからにしろ。まあ聞こえていないだろうがな」

そう言って笑いながらドラフトは茶色の光に包まれた。

光が収まった場所から出て来たのはレン君だった。

そして、そのまま前のめりに倒れて来る。

私はそれをなんとか受け止めることができた。

「すうゝゝゝ」

もしかしたらとも思ったが寄寓だったみたいです。

そこで背後からまた殺気を向けられていることに気づいた。

私はレン君を抱えたまま殺気のした方を見ると。

私の娘二人が凄い怖い顔で私を睨んでいます。

「「お母さん・・・・・・・・なんでレン君と抱き合ってるの？」」

娘達に言われて改めて自分の状態を見て見る。

倒れてしまったレン君を抱きとめるように支えてしまったので、確かに味方によっては抱き合っているように見える。

レン君の身長は低いので私の胸に顔をうずくめるような感じになっているが。

これは・・・・・・・・まずいですね。

言いわけのしようがありません。

はあ、本日最大の敵は私の娘だったようです。

【END】

Episode 4 始まりの決意

「・・・・・・・・ここは？」

そう呟いたのは全身に包帯が巻かれているレンだった。

全身に包帯が巻かれている上に頭を冷やすために置かれた氷までつけられた状態でベッドに寝かせられたいる姿は重病人以外に他ならない。

「レン様!!」

レンの声に一番に反応したのは、彼の専属メイドであるレイナーレだった。

その顔にはいくつもの涙の後がついており、ずっと泣いていたのが分かる。

「あ、レイナーレちゃん」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「どうしたの!？」

突然、何度も謝られたレンは訳も分らず混乱する。

そんな混乱しているレンにさらに追い打ちをかけるかのごとくレイナーレは泣き叫ぶ赤ん坊のように言葉を続ける。

「……レン様も起きられたことですし、私はこの屋敷から去ります。今までありがとうございます」

「はあ? どうしたの？」

辞表をレンに渡すレイナーレ。

「取りあえず、話を聞いて。私は何がなんだか分からないから」

「………はい」

そこから少し話を聞くことにした。

話しの内容はこうだった。

あの後、つまりレン達がオーク鬼に襲われた後、レン達はオリヴィエさん達に助けられた。

それでヴィヴィオとアインハルトは無事だったが、なぜかレンだけ傷だらけで倒れた。

もう既に三日は寝込んでいたこと。

ちなみに、怪我については、なぜレンだけボロボロだったかは分からないと。

それを聞いたレイナーレは自分が森に行くことを許したせいだと思いレンが起きた後に辞表を提出しようと思ったそうだ。

今回はオーク鬼はオリヴィエが全て倒した事になっていたが、その時の記憶がないレンは素直にそれを信じた。

「そっか……あのさ、レイナーレちゃん」

「はい、なんでしょう……」

「この後、務める先に心当たりはあるの？」

「いえ……どこかのお屋敷に奉公できたらいいですが……
・最悪誰かのお妾という形でも……」

このハルゲニアでは若い女の使用人のほとんどは、その屋敷の妾に
されてしまう。

中には例外もいるが、その例外は稀だった。

もちろん、その例外の中にはクスタイン領とゼーゲブレヒト領もは
いつている。

「それで、何のお咎めもなしにこの屋敷から出て行けると思ってる
の？」

「……いえ……」

「それが分かっているなら話しは早い、君への罰を言い渡す」

「……はい……」

悲壮な顔をするレイナーレ。

「これから私の専属メイドになってもらう」

「え？……それじゃあ……」

確かに今までと変わらない。

「いや、違う。レイナーレちゃんはこれから、私のお妾さんになってもらう。レイナーレちゃんが他の人に仕えなくなるか、男を好きになってその男と結婚するまでは私のお妾さんになってもらう」

「………为什么呢？罰なのに」

つまり、レンはこう言ったのだ。

他の男ができるまでは他の貴族から守ってやると。

「だって私のためにそんなに涙を流してくれる人には、それくらいの罰を与えないと私の体裁が保てないからね」

その日、レイナーレは今まで他人に見せたことのない涙を年下の男の子に見せた。

泣きやむまではレンの胸に埋もれていた。

その小さな胸に。

自分が怪我をさせてしまったと思っていた男の子の胸の中に。

昨日まで自分の弟だとも思っていた男の子の胸の中で。

○
○
○

レイナーレが泣きやんだ後、レンは自分の包帯をレイナーレに取らせていた。

それくらい自分でできると言ったのだがレイナーレがそれを許さなかったのだ。

レイナーレは治療のために水のメイジを呼んで傷を治させて、なおかつ水の秘薬を使ったそうであり、傷は完全に治っていた。

「ゼーゲブレヒト領に行くよ」

「はい、すぐに馬車の用意をいたします」

そう言ってレイナーレは馬車の手配をするために部屋の外に出ていった。

「やっぱり、魔法がほとんど使えなくても強くならないと守りたいモノは何も守れないんだな」

そうレンは呟いた。

今回の件で自分が今までやはり前世の日本にいた時の感覚が残っていることを実感したのだった。

「魔法はもう、見込みがないから……使おうとしたら剣か槍か……」

そんなことを考えているとすぐに、レイナーレが戻って来た。

「用意できました。では向かいましょう」

「ああ、ありがとう」

実際にはクスタイン領とゼーゲブレヒト領の間にはそれほどの距離はない。

毎日のようにアインハルトとヴィヴィオが遊びに来るのが良い証拠だ。

しかし、その距離を考えれば異様なほどの数の警備の者がいる。

やはり、先日のオーク鬼のことがあったからだろう。

レンはあの自分達を呼びに来てくれた警備主任のことを聞いたが彼はレンよりも遥かに傷が浅く、すぐに動けるようになったそうだ。

しかし、その警備主任も今回のことで責任を取ると言ってやめるつもりらしいとレイナーレは言ったのでレンは

「後で話しをするからそれまでは、やめないように伝えておいて」

そうレイナーレに伝言を頼んだ。

あの時、逃げろと言ってくれた警備主任をレンは手放すつもりはなかったのだ。

その話しをした後、馬車の中の正面に座っているレイナーレにレンは自分の中にある決意のために両親に会いたいことを伝える。

「……………どうしても必要なことなのですか？」

レイナーレは暗い顔をする。

レイナーレはレンが両親を憎んでいると思っていたのだ。

幼い時から自分のことをほったらかしで、商売する両親を。

しかし実際は、すでに精神年齢が大人なレンにしてみれば、特に気にかけていることはなかったのだが。

「うん、父様と母様はギルドの方に手紙を出せば連絡できると思うけど……なにせ数が多いから」

「分かりました。その任、専属の名にかけて遂行してみます」

「あ、でもそんなに意気込まなくてもいいよ……」

あまりのレイナーレの闘志に少し引いてしまうレンだった。

会話をしている間にゼーゲブレヒト領にあるゼーゲブレヒト家の屋敷に着いた。

過度な装飾はされていないが、どこから攻められても対応できる実戦的な家の造りになっている。

レンはゼーゲブレヒト家の屋敷に來るとこれに感心する。

自分の家もある程度は考えた造りになっているが、ここまで過度な造りになっていない。

馬車を降りると、ゼーゲブレヒト家の老執事が目を丸くしてレンを見た。

「レン様、起きられたのですか!？」

「はい。ご心配をおかけしました」

「お、お嬢様達を呼んで参ります!! すみませんが応接室に向かってください!!」

老執事はその歳に似合わず俊敏な動きで客であるレンを置いて走って行った。

「私はほったらかしか」

怒ったというよりあきれた風にレンはそう言った。

「あはは、仕方ありませんよ。アインハルト様とヴィヴィオ様はゼーゲブレヒト家にとっては天使ですから」

「……確かに始祖よりも信仰してそうだね」

二人が応接室に向かう最中出会った使用人達全員が『お嬢様を呼びに行ってください!!』と叫んで消えていったのであながち間違いではないのだった。

勝手に入った応接室で待っていると

「「レン君!!」」

泣きながら、アインハルトとヴィヴィオが入って来て、そのまま、レンに抱きついた。

「どうしたんだよ、二人共」

その時のレンの感情は二人を異性と見るよりも自分の娘を見る父親に近かった。

「ひっく……だって、レン君が倒れちゃって……」

「ぜんぜん……起きないって聞いて……私達……ひっく」

「ありがとう……」

レンは優しく二人の背中に手を回し撫でる。

この光景を使用人達が泣きながら扉の隙間からのぞかっていたのを聞いた三人は後に顔を真っ赤にすることになるのだが、今だけは温もりを分かち合うのだった。

○ ○ ○

「怪我が治りなによりです」

そう言ったのは騒ぎを聞きつけ何事かと見に来たオリヴィエだった。

「ありがとうございます」

「それでなのですが……」

「はい」

「アインハルト、ヴィヴィオ。レン君を放してあげなさい」

今、レンはオリヴィエと向かい合う形で座っているがアインハルトとヴィヴィオは、レンの両隣に座りレンと腕を組んでいるのだった。

使用人達に見られていたことが分かると一度は放したのだが、使用人達がなくなるとまたレンにくっ付いたのだ。

「「嫌」」

「はあ……仕方ありませんね。それで今日はこういった要件で？」

「今回のことでお礼と謝罪を。ゼーゲブレヒト家にとって大事な娘

さん二人を危険な目に合わせてしまつて申し訳ありません」

「レン様！！それは私の責任です！！」

「いや、使用人の責任は私の責任だよ」

レイナーレの叫びに反論するレン。

「いえ、今回のことはアインハルトとヴィヴィオにも非がありました。それにレン君が二人を守ろうとしてくださったのでしょう？だから不問ですよ」

「ありがとうございます」

「それにしても、自分の使用人を庇うなど六歳とは思えないほど立派ですね」

「ありがとうございます」

「それでは、魔法の修行は明日ということで」

オリヴィエはそう言い、話を閉めようとしたがレンは反論した。

「いえ、先ほども言いましたように私は謝罪とお礼を言いに来ただけです。魔法はいりません」

「え？」

驚いたのはオリヴィエだった。

「なぜです？ 今回の件で力が必要なのは分かったでしょう？」

「はい。この世界で生き抜くためには何かしら力が必要だと学びました。しかし私には魔法の才はない。だから……私は別の力を得ることにします」

「しかし！！あなたには……」

この時、初めてレンはオリヴィエが叫ぶように声を上げた。

「私には魔法の才はない。これは自分が一番良く分かっていることです」

「・・・・・・・・・・そうですか。分かりました」

渋々といったようにオリヴィエはそう口にした。

そこで、今日は解散となった。

アインハルトとヴィヴィオは残念そうだったがレンが病み上がりと言うことと、レンが『また明日』と言ったことによって納得した。

○
○
○

ゼーゲブレヒト家訪問から五日過ぎたある昼下がりがりだった。

クスタイン家に衝撃が走った。

使用人は慌てふためいて掃除を始め、料理人は食材の発注のため馬を走らせた。

なぜ、こうなったかと言うと今朝まで遡る。

「レン様、お手紙が来ています」

手紙を持ってきたのはレイナーレではなく他の専属のメイドだった。

「ありがとう」

封を開けて中を見て見ると中には、レンの両親からの手紙が入っていた。

その内容は

『今日の昼ごろ屋敷に帰る。その時にレンの欲しいモノも持って行く』

とだけ書かれていた。

「父様と母様が今日の昼ごろ帰るって」

「ええええええ！？」

そう呟いたレンの言葉を聞いたメイドは驚きの言葉を上げて。

レンの両親つまりクスタイン家の当主と婦人は年に数回しか屋敷に帰ってこない。

なぜなら、商売するのが趣味であり仕事であるからだ。

ゆえに使用人達も仕事をサボっているわけではないが、そこまできつちりやっていないのだ。

レンがそこまで厳しくないこともあるが。

「失礼します！！」

と言に残してメイドは他の使用人にこの出来事を伝えるために部屋を出て行った。

そして、時間は戻る。

手紙に書かれていた時間つまり、昼ごろ。

レンの部屋にレイナーレが走ってやって来た。

「レン様！！当主様とご婦人様が帰って参りました！！」

「ありがとうございます。今、行くよ」

そう言って腰をあげるレン。

その時だった。

「レンちゃん～～～ん！！」

部屋に一人の女の人が入って来た。

歳は若い二十歳を少し過ぎたくらいだろうか。

瞳はレンと同じ緑色で赤い髪を腰まで下ろした美人な女の人。

そして勢いよくレンに抱きつく。

「か、母様!？」

「もう、もっと会いにこればいいんだけど・・・ごめんね」

レンの母親は年に数回しかレンに会わない。

しかし、レンのことを愛しているかと聞かれば、必ずYESと答えるほど愛していた。

「いえいえ、母様。私には皆がいますから」

「まあ!？レンは母に会えて嬉しくないのですか!？」

「いえ、そんなことはないのですが・・・」

レンは少し母親が苦手だった。

年に数回しか会わないため母と言われてもいまいち、ピンとこないのだ。

前世の母がこの母とずいぶん違うから、それもあるのかもしれないが。

「ほどほどにしてやったらどうだ？」

「あら、あなた、私とレンちゃんが触れ合う時間の邪魔をするのですか？」

「いや・・・そんなつもりはないが・・・」

そう言われてたじろいだのは茶色の髪に灰色の瞳をした身長170センチほどの男だった。

ドラフトほどではないが筋肉質だった。

「お久しぶりです父上」

「ああ、それにしてもレン。貴様、少しやんちゃしたらしいな」

「あ、はい」

「そうです!! 聞きましたよ!! レンを傷つけるなら亜人を殲滅いたしましょうか!!」

「母様……お金がある分、本当にやりそうだからやめてください」

「……むう、レンがそう言うなら……」

「それよりも、レンに贈り物があるのではないのか？」

「そうでした!! レンに言われたモノを探して来ました!! 庭の馬車にありますので来てください!!」

そして三人で移動した庭には

「……母様……これは……」

庭にあった馬車は一台ではなく三代だった。

それの中には剣で埋め尽くされていた。

その数およそ、六百本。

「レンちゃんに言われた面白そうな剣を母は探して来ました!!」

「……確かに手紙に書きましたが……この数は……」

「気にするな、どうせ私達の商会の商品だ」

「やはり少なかったですね!! あなたが数を減らせて言わなければもっともってきたのに!!」

「いや……いくら何でも、千五百本は多すぎるような……」

父のその言葉を聞いたレンは絶句した。

今まで母に頼み事をしたことがなかったがまさかこんなことになるとは思ってもみなかったレンだった。

「ありがとうございます」

「ねえ！！あなた聞いた！！レンが私にありがとうって言ったのよ！！ああ！！もう死んでもいいわ！！」

「頼むから死なないでくれよ。レンが寂しがるじゃないか・・・」

あきれた顔で棒読みに近い形でそう言うレンの父。

「そうね！？あなたに言われるまで気づかなかったわ！！死んだらレンちゃんの傍にいられないわね」

もはや、ツツコムことをやめたレン父だった。

それからレンはある剣を探していた。

レンが両親に頼んで探して来てもらった物はある意味曰くつきの剣である。

装飾などがされていることが条件ではなく。

例えば喋る剣、変な形の剣つまり今は刀などの剣がほしかったのである。

「でも……本当にこんな変な形の剣で良かったの？もっとレンちゃんにふさわしい剣を私がオーダーメイドで作ってあげるわよ」

もちろん、母が作るのではなく鍛冶屋に作らせるのだが。

「うんうん、ありがとう。もしこの中に気に入ったのがなかったら、他のを見せてもらってそれでもダメだったらお願いするよ」

「また、レンちゃんに頼られてしまったわ。どうしましょう、あなた」

「いや、好きにすればいいと思うぞ」

もはや、関わらないようにする父だった。

それからレンは剣の選抜を始めた。

剣事態の質は分からないので気にいったモノを選抜していくだけなんだ。

それから二時間くらい剣の選別をした所でレンは選別をしている最中一本の剣に出会った。

「……………母様……………これは」

それは黒い刀身をした見事な刀だった。

「え？ ああ、それはね。なんか良く分からないけど道で農民の人が落ちてるの拾ったらしくてね。それで持っても仕方ないから売りたいって昔言ってきたから一応買っておいたんだけど、黒い剣で変な形状をしてるから一応持ってきたんだけど……………まさか……………レンちゃん！？それで指を切っちゃったの！？なんてこと！？そんな剣早く溶かしましよう！！」

「いやいや！！俺はこれが気にいったから貰おうと思って！！」

「ええ！？ よりにもよってそんな剣！？ それ滅茶苦茶安く買った奴よ」

「……………これきつと名刀だよ……………それでもう一つだけお願いがあるんだけど」

「何？お母さん、レンちゃんの頼み事なら何でもきいちゃう！！」

「この剣に土のメイジ……………えっと、スクウェアの土のメイジに強力な固定化をかけてもらいたいんだけど……………」

「もう、そんなことならいくらでもしてあげちゃう♪」

「ありがとうございます。これに決めました」

「そうなの？他の剣はいいの？全部あげちゃってもいいのよ？」

「はい、これ一本で十分です」

「それじゃあ、お菓子食べに行きましょう♪東方の面白いお菓子が手に入ったの♪」

ニコニコの母に引っ張られて行くレンだった。

E p i s o d e 0 4 始まりの決意（後書き）

当初、二週間くらいかかると思っていたのですが、今週は少し色々サクサク書けてしまったために、更新でき（笑

次は時間がかかると思います。

今週はたまたまなので更新速度には、あまり期待しないでください（汗

誤字報告&感想お待ちしております。

Episode 05 初めての抱擁

「レンちゃん、固定化かけてもらって来たわ♪ゲルマニアの最高のメイジに♪」

ルンルンとスキップしながらレンの自室にやってきたのは、レンの母だった。

レンと同じ赤い髪を腰まで伸ばしている髪を揺らしながら。

「ありがとうございます。固定化をかけたメイジは何か言っていましたか？」

「うーっ、固定化をかけてくれたメイジは腕は確かなんだけど変人だね。自分の興味あること以外は気にしない人なの。だから何も言ってこなかったよ」

「そうなんですか。母様、本当にありがとうございました」

「うんうん♪レンちゃんのためなら例え火の中水の中♪それに、母様なんて堅い呼び方じゃなくてママでもいいのよ♪」

「い、いえ、それは……」

顔を真っ赤に染めて、下を向いてモジモジするレン。

「もう、レンちゃんたら可愛いんだから♪」

自分の胸にレンを抱き寄せるレンの母。

「か、母様」

さらに顔を真っ赤にさせるレン。

「ふふ、もう仕事全部、やめてレンちゃんの所に戻ってこようかしら……レンちゃんと趣味の商売を比べたらレンちゃんの方が大事だもん♪」

「か、母様……それでは、何人もの母様の部下の人が路頭に迷ってしまいます」

「うゝゝん、五百八十六人の部下なんてレンちゃん比べたら、

全然気にしないんだけどな~~~~」

レンの母は商売にかけては天才だった。

その証拠に自分の部下の顔と人数を全て暗記しているのだ。

「でも、レンちゃんの頼みなら仕方ないか……そうだ!!
その剣をレンちゃんが降った所見てみたいな♪」

「え!?!? 今ですか!?!」

「うん……次いつ戻ってこれるか分からないから……」

屋敷に帰って来てから四日しか帰って来ていないのに、もう、レンの父は仕事のため屋敷を出て行った。

母は、レンの頼みのため一日土のメイジに会いに言っていたので、もう二日ほど屋敷に残る予定だが。

「……分かりました……やってみます」

「うん♪それじゃあ、中庭に行こう♪」

ご機嫌の母に連れられてレンは歩いていったのだった。

○
○
○

「では」

レンは自分より長い刀を腰の所に構える。

レンの身長が106センチなのに対して黒刀の長さが140センチ
鞘の端は地面についていてそれを見た人はたいてい微笑ましいと思
うだろう。

その刀の鞘を地面に落とす形で抜刀する。

レンの身長的にはその方法しか刀を抜刀できないのだ。

「すこ〜〜い!」

レンの母はそれを見て拍手する。

レンが何をしても拍手するだろうが・・・。

「が、頑張ります」

レンは顔を少し赤くしながら刀を構える。

そしてレンが振ると強く意識した時だった。

刀に僅かだが、魔力を持っていかれたような気がした。

「っ!」

「どうしたの!」

レンの僅かな変化も見逃さない母。

「だ、大丈夫です」

「そう……でも無理しちゃダメよ」

「はい」

もう一度意識するレン。

すると、やはりまた魔力を持っていかれた。

レンは今度はそれを我慢せずに今度は逆にその要領で刀に魔力を注いだ。

すると………

「なんですって!？」

レンの母の驚きの声が上がった。

それもそのはず土系統のスクウェアメイジに固定化をかけてもらったのにも関わらず、レンの持つ刀にヒビが入りだしたからだ。

それを見てもレンは魔力を越えるのをやめない。

やめてはいけないような気がしたからだ。

そして段々とそのヒビが多くなり刀身全てに及んだ時、刀身の碎けた。

かに思えたが黒い刀身の中から白銀に輝く綺麗な刀身が現れた。

「・・・・・・綺麗」

レンの母がそう咄嗟に漏らしてしまうほど綺麗な刀身だった。

「・・・・・・これは？」

「ふわ~~~~~~~~良く寝た良く寝た」

突然どこからともなく声が聞こえて来た。

それに驚いてレンの母はレンの傍まで駆け寄り

「誰!？」

と叫んだ。

「大丈夫だよ、母様」

「え?でも……」

「その声はこの刀から聞こえてきます」

「え?」

そう言った。

「え?もしかして……この白銀の剣って、インテリジェンスソードなの?」

「みたいです……」

「ほう、おまえを知らずに俺を呼んだのか……しかしこの魔力……『器』じゃないのか？」

刀の声は中年の親父のような声だった。

「器って？」

そう聞くレン。

「はて？ なんだったかな？ 眠りについてから何百人もたっているから忘れた」

「え？」

「しかし、おまえがその魔力を持っているならおまえが俺の主だ。あるじこれからよろしく頼むぜ」

それを聞いたレンの母は思った。

（この剣をレンちゃんの傍に置いておくと、きっとレンちゃんの教育上良くない）

「レンちゃん、私が新しく剣を買ってあげるから、これは捨てましょう」

「な！？ご婦人、俺はなかなか使える剣ですぜ！！それに剣じゃなくて俺にはラグナロクって立派な名前があります！！」

「……………ねえ、お願いレンちゃん」

そう言う母とは別にレンは驚いていた、この刀つまりラグナロクの重さに。

「母様」

「なに？」

「ありがとう！！」

精神年齢のせいで、なかなか子供らしい行動ができなかったレンだが、この時は本当の子供のように喜び母に抱きついた。

「な!？」

レンの母は今まで自分から抱きついたことは合っても抱きついてもらえなかった。

ずっと前からレンの方から抱きついてもらいたいという夢を持っていたのだ。

それが思わぬ所で叶い。

天にも昇る気持ちだった。

というより。

「か、母様!？」

レンの母は気絶していた。

「だ、誰か来て~~~~」

レンの叫びが中庭に響くのだった。

○
○
○

母をベッドに寝かせ後のことをメイドに任せたレンは自室でラグナロクと話しをしていた。

「それでラグナロクは何なんだ？」

「うゝゝゝん、正確には思い出せませんね。旦那」

「旦那？」

「はい、器で俺の主あるじだから旦那です」

「そうなの・・・」

六歳で旦那と呼ばれるのは実は不本意なレンだった。

「それですね。俺に何を聞きたいんですか？」

「あ、そうだ。君は何なんだ？」

「うゝゝゝん、俺が作られたのは詳しくは大昔のことなんで忘れてしまったんですが分かるのは俺がラグナロクという刀で、王の器の銕だったことは覚えていますが・・・・他はすいません。忘れま
した」

「そうなのか・・・・・・大昔ってどれくらい？」

「うゝゝゝん、覚えているのは・・・・・・あ、ブリミルって奴が
いました!!」

「ブリミル!？」

「はい」

「そうか……このハルゲニアでブリミルを名乗れるのは……
……やっぱり始祖だけだろうな……そうじゃないとロマ
リア当たりがうるさそうだし……としたら6000年前か」

「6000年！？もう、そんなに経ってるんですか。通りで記憶が
あいまいなはずだ」

「それで君の能力は？」

「はい……正直、あまり覚えていないのですが……
・確か、器の魔力を得ることで切れ味を増し、重さを軽くするんだ
ったと思います。それで、もし器以外の悪しき心の者が使った場合
はその者の魔力を全て吸いつくします」

「え？」

「まあ、悪意と言っても旦那に好意を持っている者は省きますが」

「そうなのか……」

「はい。でも、あまり俺を手放さないでくださいね。俺って使い勝
手いいから」

「ああ、それはさっきので分かった」

あの時、つまりさっき母に抱きついた時、ラグナロクは羽のように軽かったのをレンは覚えている。

（しかし・・・ラグナロク・・・神々の運命って意味だったはず。もしかしたら凄い刀を手に入れたのかも・・・）

「あ、そうだ。ラグナロク、おまえって刀の指導できるか？」

「え!？」

「どういことですか？」

「いや、今のハルゲニアには剣の使い手はいても、刀の使い手はほとんどいないんだ」

「・・・・・・・・そうなんですか・・・・・・・・なら、あれが役に立つかな・・・・・・・・おぼろげにしか覚えていませんが・・・・・・・・大丈夫だと思います」

「良かった。ありがとう」

「いえいえ、なかなか旦那の頼みですから」

そう話しがまとまった所で、

「レンちゃん!!」

「あ、母様、もう良くなったのですか？」

レンの私室にレンの母が突入して来た。

「うん、ありがとう。レンちゃんがベッドまで運んでくれたんですって♪」

「はい、皆にも手伝ってもらいましたし」

「それでも、ありがとう」

「どういたしまして」

そこでレンの母は少し暗い顔をする。

「それでね．．．．．本当に残念なんだけど、今、商会のバカな部下から連絡があつて．．．．．今から商会に戻らないといけないことになっちゃったの．．．．．後、二日はレンちゃんと本当なら一緒にいられたはずなのに．．．．．本当にごめんね」

「仕事なら仕方ありません」

「うゝゝゝレンちゃんはなんて良い子なのかしら．．．．．また何か欲しいモノがあつたら言つてね。お母さんが意地でも手に入れてみせるから」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、私は行くから」

「門まで見送りに行きますよ」

「うんうん、レンちゃんに見送りに来てもらうと、そのまま連れて行っちゃいそうだから．．．．．ここで良いよ。じゃあ．．．．．レンちゃん行ってきます」

「行ってらっしゃい。母様」

レンの母は瞳から涙を流しながら屋敷の玄関に止めてあった馬車に駆け込んだ。

「旦那も大変ですね」

「言うなラグナロク・・・・・・・・母様はあれですごい人なんだぞ」

「それも含めて大変ですね・・・・・・・・」

その日、レンはラグナロクに励まされながらその日、眠ったとか。

E p i s o d e 0 6 始 め て の メ イ ド (前 書 き)

やっぱり、二週間くらいの間が空いてしまいました。

すいません。

Episode 6 初めてのメイド

【INレイナーレ】

皆さん、こんにちは、レイナーレです。

私はゲルマニアの貴族であるクスタイン家のメイドです。

と、言ってもまだまだ新米で三カ月程前に雇ってもらったばかりです。

そんな私ですがレン様に気にいられて専属メイドをしています。

これでもなかなか、発言力はあるんですよ。

でもその発言力を使ったことはありませんが。

そんな私のご主人様？は実は六歳なんです。

それも故郷にいる弟と同じ歳の六歳なんです。

お世話をしていると少し……少しだけです。故郷の弟を思い出します。

私の故郷はクスタイン領ではありません。

少し特別な理由でクスタイン家で働いているのですが。

ちなみに実家はものすごく貧乏です。

だって私が住んでいる領地の税金は……泣きそうな位、高いんですよ……。

それに比べてクスタイン領の税金の安さと言ったら……
四分の一以下ですよ。

それもあるって平民が移住したい領地ナンバー1がゲルマニアではクスタイン領なんですよ。

それも皇帝陛下から買った位は子爵様なのですが……あ！！

子爵様の位を買うのにも私達が一生遊んで暮らせる額のお金が必要なんですよー！！

それが……今度、ゲルマニアの経済を大きく発展させた功績で伯爵に昇進されるとか……本当にすごいですよ。

まあ、私には関係ないですけど……。

それにしても……故郷の家族は元気にしてるでしょうか……。

私がクスタイン家から頂いているお給料の三分の二は送っているの
で大丈夫ですよ。

ちなみに、この間『森のオーク鬼事件』のため私はレン様の妾件、
専属メイドになってしまったんですよ。

ですが……レン様なら……あ、いやでも弟と同じ
年の子ですし守ってあげたいとか、そんな意味ですよ。

『森のオーク鬼事件』は私達メイドの間では、かなり有名ですよ♪

私達のレン様への忠誠心は、どこの貴族様の所のメイド達よりも強いと自負していますよ。

そして、今……レン様は……瞑想なるモノをしているそうです。

なんでも……かたな？での戦い方をイメージ？しているそうです。

私には難しすぎて良く分かりませんが……。

あ、そうそう、そのかたな？という剣はレン様のお母上様のプレゼントなんですよ！！

メイドの皆からレン様の両親はレン様が幼い頃から、ほったらかしにされていて特に母親が苦手だと聞いていたので、私はてっきり憎んでいるのかと思っていたのですが実際は全然違いました。

溺愛されすぎて苦手だったみたいです。

私の勝手な勘違いで本当に良かったです。

それにしても、レン様は座禅？という姿勢のまま、かたな？を自分の前に突き刺しているのですが・・・六歳の子供が長時間同じ姿勢をしていられるって本当にすごいですね。

私が六歳の時は外で遊び回って、同じ所にいるなんて無理ですよ。

毎日、三時間ほどされて、その後、走り込みをされているんです。

本当に凄いですね。。。やっぱり平民と貴族の差でしょうか。

「ふう、終わった」

「旦那、お疲れ様でした。今回で三階層まで攻略されたんじゃないですか？」

「いや、確かに四階層まで行けたけど・・・まぐれだと思う」

「それでも凄い進歩ですよ。たった二週間で」

「そうかな」

「はい。しかし、早くしないとあのお嬢ちゃん達が来ますぜ」

「そうだな」

そう会話されて走り込みに行ってしまった。

今、レン様が話しておられたのは、ラグナロクというレン様の剣なんです。

なんでもインテリジェンスソード？という特別な魔法の掛かった魔法の剣なので話せるんです！！

始めて見た時は腰が抜けてしまったのですが・・・・・・・・それは内緒です！！

「おお、レイナーレの嬢ちゃん」

「ラグナロクさん、お疲れ様です」

「ああ、しかし旦那は天才だな」

「そうなのですか？」

「ああ、きっと将来化け物級の力を得られるよ。だから今からしっかり手綱をもっとけよ」

「え!？」

私は顔を真っ赤にしてしまう。

「誰が見ても分かるって、それに嬢ちゃんも顔は悪くないんだから、成功すれば玉の輿だぞ」

「うう~~~~」

「ほら、いつもクールみたいな顔してないで、その顔を旦那に見せてやれよ」

「でも、レン様にはアインハルト様とヴィヴィオ様が……」

「嬢ちゃんにある言葉を教えてやるよ」

「なんですか？」

「男は胸に希望を求める!!！」

「っ!？」

「そして!! 旦那は巨乳派だと俺は見ている!! そして嬢ちゃんは
!!！」

自分の胸を見て見る。

・・・た、確かに周りの子より大きい。

「自信を持って!! 旦那の相棒であり矛盾である俺が応援してやる!!！」

「はい!! 師匠と呼ばせてください!!！」

私の心と希望は一瞬でこの剣に奪われました!!！」

きつとレン様の相棒は魔剣です!!

「何してるんだ？」

「「っ!？」」

声の先には汗をかいているレン様がいた。

「あ、レン様、これタオルです」

「ありがとうございます」

いつものようにタオルを渡す。

でも……絶対に顔は真っ赤だ!!

ど、どうしよう!?

「わ、私!! 他の仕事があるので行ってきます!!」

「あ、うん」

そう言って脱兎のごとく逃げ出す。

だって!!

恥ずかしいんですもん!!

そして、屋敷の自室付近まで来た時に同室の子にある手紙を渡された。

これは……。

その手紙には、よく見知った下手な字が書かれていた。

【END】

「それじゃあ、始めようか」

「はい、旦那。いつでも構いません」

「分かった、行くぞ」

レンは今、中庭にラグナロクを突きさし、その前で座禅を組んでいる。

そして、大量の魔力をラグナロクの中に流し込む。

すると、一瞬だけ黒かった刀身が銀色に輝いた。

それと同時にレンは瞳を閉じた。

そして次に目を開いた時には白い部屋にいた。

何もない四角い部屋で縦横の長さが100メートルくらいある少し大きめの部屋。

そして、そこにレンと黒い騎士甲冑をつけた騎士が立っていた。

「我が主よ、^{マスター}ようこそおいでくださいました」

「今日も頼む」

「御意」

真っ白な部屋に真っ黒な騎士甲冑はよく目立つ。

「では始めましょう。来い」

騎士がそう言うのとレンと騎士の前に刀身が黒い刀が現れた。

それはラグナロクに似ているが絶対に違うと断言できる。

なぜかレンはそう思っていた。

「では、第三階層の試験に入ります。分かっているとは思いますが第一階層と第二階層で会得した技を使い私に斬撃を加えてください。何度も言うようですが、この階層の攻略には、第一、第二階層とは

違い時間がかかります。くれぐれも焦らないように」

そう注意を促す騎士。

「分かってるって。じゃあ」

「「押して参る!!」」

二人は同時に地面を蹴った。

レンはこの世界の第一階層で会得した『一陣』いちじんを発動するべく、重心を低くして黒騎士の足元に滑り込むように移動する。

しかし、それを黒騎士はそれを見越したかのように黒騎士は自身も重心を低くして迎撃する。

そして、二人の黒い刀が交錯する。

「主よ、そんな分かりきった攻撃では通用しませんよ。例えばここが精神世界といえど、この世界での死は現実世界の精神の死だと自覚してくださいと何度も言っていると思います」

「分かってる！！」

レンが焦ったような声を出しながら後方へ下がる。

今、黒騎士が言った精神世界とは、レンと黒騎士がいる『この白い世界』のことだ。

ここはレンの魔力とラグナロク的能力によって創られたいわゆる異世界。

レンはこの世界では精神のみでいる。

だから、この世界での死は精神のみが死ぬ。

つまり、現実世界に置いて来ているレンの体は無傷だが精神が死んだため、死亡する。

「だから！！本気でやってるつもりなんだけど！！」

「しかし、そんな単調な攻撃では実戦に出れば今ので死んでいます。もう少し考えてください」

焦るレンに対して余裕を思わせるほど悠長に黒騎士が言う。

次にレンはもう一度、黒騎士に対して正面から突撃する。

「はあ………それでは先ほどと同じです………死にますよ」

最後の一言には確実に殺意が含まれていた。

この精神世界では実態がないせいで人の感情は現実世界より確実に伝わる。

「っ!？」

それによってレンの体は少し硬直してしまう。

まだ、幼いレンの体には黒騎士が発する殺気は確実に毒だからだ。

しかし、レンはさきほどの勢いはないにしろ。

足を止めなかった。

「……確かに止まらないのは立派ですが勇気と無謀ははき違えないでください」

黒騎士は、あきれたように刀を片手で天高く突き上げる。

本来なら上段を取れば他の所がガラ空きになってしまうため、普通なら弱くなる。

しかし、レンは知っていた。

黒騎士が上段を取るその意味は一切後ろに下がらずに一撃必殺の攻撃を繰り出すための構えである。

前に一度だけ見たことがあるが、その時は全く反応できなかった。

本来なら確実に真つ二つにされていたはずだが、その時はレンの顔の前で止めて『寸止めは今回だけです。次に見せる時は寸止めしません。ですから必ず避けてくださいね。そうしなければ死にますよ』と淡々と言って来たことがあった。

しかし、レンは歩みを止めない。

「残念です主。安らかに眠ってください」

「眠らねえよ!!」

黒騎士の上段に構えられた刀から神速とも呼べる速度で刀が振り下ろされる。

それによってレンの体は真っ二つに・・・・・・・・ならず消えた。

「終わりました。残念です」

「俺の勝ちだ」

「ええ」

黒騎士に斬られたはずのレンは黒騎士の後ろに立って斬撃が繰り返される。

それを受ける黒騎士。

「第三段階攻略おめでとうございます」

「いや、今の攻撃は防げただろ？」

「いえ、見事なまでの『月読』でした。私が少しだけとはいえ惑わされてしまいました。ですから、今回は私の負けです」

レンが使ったのはラグナロクの中にある『異端』のみが使える特殊な力、その一つが『月読』だった。

その能力は少しだけだが相手を幻覚を見せることができる。

それによってレンは黒騎士に『二回、自分が正面から攻撃をしてくるといふ幻覚』を見せていたのだ。

幻覚を見せるための方法は相手に三メートル以内に近づいてただ目を見て相手の目に魔力を叩き込んで自分の好きな映像を見せる。

ただし、これは微妙な魔力調整が必要なため戦闘中は普通は使えない。

それが分かっているからレンは黒騎士に斬られ合格にしたのだ。

「どうやって月読を使用したのですか？あれは戦いながら使えないはずでは？」

「ああ、それは簡単だよ。戦闘開始直後の場所が三メートル以内だったからだ」

「………始めから私は幻覚と戦っていたのですか」

「ああ」

「さすがは『異端』を継承されているだけありますね」

未だに『異端』が何なのかをレンは教えてもらっていないが、それでもレンは『月読』と『一陣』を教えてもらえているので、文句は言っていない。

「それでは第四階層に行きましょう」

「了解」

そう黒騎士が言った時にレンの前に白い光と共に真っ白な階段が現れた。

それをレンは何も言わずに昇って行く。

そんなレンを無言で見送る黒騎士。

そして上った先もまた、白い空間だった。

「待っていたぞ、主」

そこに待っていたのは黒騎士とまったく同じ赤い鎧を身に纏った騎士だった。

「黒騎士？」

「いや、俺は黒騎士であって黒騎士ではない、まあ、赤騎士とでも呼んでくれ」

レンのことを主と呼ぶ割に敬った風な

「ああ、それでここでは何を？」

「ここでは俺の攻撃を会得してもらおう。まあ、難しい話しはなしだ。ただ俺の攻撃を攻撃で防いでくれるだけでいい」

「分かった」

「じゃあ、行くぞ!!」

そう言い、赤騎士は右手に持った刀で切りかかる。

それをレンも刀を使い弾く。

しかし・・・

「こんなもんか・・・」

そう言ってレンは赤騎士の幾重にも枝分かれして見える刀によって斬られて、現実世界に戻ったのだった。

「ふう、終わった」

「旦那、お疲れ様でした。今回で三階層まで攻略されたんじゃないですか？」

「いや、確かに四階層まで行けたけど……まぐれだと思う」

「それでも凄い進歩ですよ。たった二週間で」

「そうかな」

「はい。しかし、早くしないとあのお嬢ちゃん達が来ますぜ」

「そうだな」

そして、レンは走り込みを行うために庭を走り出した。

例え精神世界で技を磨いたとしても、現実世界の体が弱ければ精神世界で会得した『一陣』も『月読』も使えないからだ。

○ ○ ○

レンは走り込みを終えた後、いつものようにアインハルトとヴィヴィオが来るのを待っていた。

「暇だな〜」

「旦那、それならもう一度行きますか？」

「いや、あれは一日一回が限界だ。俺の魔力がもたないって」

「……大丈夫だと思いますが……まあ、そういうことにします」

「レン様!」

そんな平和な一時を壊すかのごとく、一人のメイドが駆けこんで来た。

「どうしたの？」

「それが!!」

「で？」

「それが!?!」

メイドはあまりにも取り乱し過ぎて本題を言えない様子だった。

「はい………これを」

やっこの思いでメイドはレンに一通の手紙を渡した。

そこには、レイナーレの文字で確かに辞表と書かれてあった。

「これは!?!」

「どうしたんだ？ 旦那、そんなに取り乱して……」

「これを」

「っ!？」

辞表を見せるとラグナロクも驚く。

「そんなバカな!？ あの嬢ちゃんは!！」

「そうです!! レイナーレが自分の意思でレン様の元を離れるなんてありえません!!」

ラグナロクに続き、メイドもそう言う。

レンも内心では驚きのあまり、これが夢ではないかと思う。

レイナーレには他の貴族から守ってやるという意味も込めて『俺の妾だ』宣言をしているのである。

そんな娘が勝手に辞表を出して使用人をやめたりすれば最悪の場合
は不敬罪で殺されてしまう。

もちろんレンはそんなことしないが……。

「取りあえず、辞表を呼んでみる」

そう言ってレンは辞表の中を読みだす。

拝啓

レン様へ。

今までとても良くしていただいてありがとうございました。

突然のことで大変申し訳ないのですが、この度、私は故郷に帰らせて
いただきたいです。

レン様は私を守ってくださると言ってくださったのに、勝手に出て

行く私をお許してください。

敬具

それだけ書かれていた。

「……すまない。俺は行くところがあった。アインハルトとヴィヴィオが来たら帰ってもらってくれ」

レンは手紙をメイドに預けてラグナロクを腰にさして、スタスタと歩いて行く。

「旦那、何て書いてあったんですか？」

「書いてあったのは、やめるとだけしか書いていない」

「でしたら……」

「しかし、紙には大量の涙の跡がついていた」

ハルゲニアでは紙は貴重であり平民の身分では例え専属メイドでも何枚も持っていないので、例え多少涙がついたとしても、使うしかないのだ。

「レイナーレは泣いていたみたいだ」

「……そうなんですか」

「俺は、あの森で誓ったんだ。俺の周りの人間は全部守る。それがどんなに困難な道でも」

「分かりました。旦那、不詳ラグナロク。旦那の矛となって力を振るいましょう」

「ありがとう」

レンは急ぎレイナーレの元へ向かうのだった。

E p i s o d e 0 7 始まりは異端と家族（前書き）

長い間、放置してしまいました。

すいません。

Episode 07 始まりは異端と家族

レンは馬を走らせてすでに二時間ほど経過していた。

「旦那、少しは休憩しましょう。旦那は今日すでに訓練や走り込みを終えています。これじゃあ、着いた時には倒れてしまいます」

そう声をかけたのはレンの腰につけられている鞆に収まっている刀のラグナロクだった。

「…………なぜだか分からないが、なんか嫌な予感がする…………んだ。だから」

「しかし、旦那が倒れてはレイナーレだけでなく他の使用人や旦那の両親が悲しみます」

「…………でも」

「はあ、旦那はこう言う時だけ頑固だなんですから」

「……否定しないよ」

「貴様止まれ!!」

ラグナロクとレンがそんな会話をしていると、鎧を着た男に呼び止められた。

その鎧にはゲルマニアの騎士であるための紋章が入っていたので、レンは渋々、止まって騎士の元へ行った。

「なんですか？私は急いでいるのです。できれば手短にお願いしたい」

レンは機嫌が悪そうなのを隠そうともせず、騎士に言い放った。

さすがに騎士も十にも満たない子供にそんなことを言われたために不機嫌になった。

「貴様、私を愚弄しているのか？」

「いえ、そのようなつもりはまったくございません。本当に急いでいるのです。ですから・・・・・・」

「分かった。しかし、すぐに済むかは分からない」

「・・・・・・それでなんですか？」

「少し来てもらおう」

男の騎士は着いてこいとばかりに、後ろを向いて歩きだす。

レンが子供だから背中を見せたのか、それとも逃げても捕まえられないからか。

確かに背中を向けている今なら逃げられるが悪いこともしていないのに逃げるほどレンはバカではなかった。

男に連れられて来た場所は何人も騎士がいる場所だった。

その中の一人がおもむろに前に出て来た。

「はあ、私は現地の子供を連れて来いこいと命令したのだぞ？」

前に出て来た男は、レンと同じ赤い髪を持っていた。

しかし、その身に纏う雰囲気は長年の戦士のそれだった。

その男にレンは見覚えがあった。

「はい。ですから――」

「この子は確かに現地の子供だろうが貴族だろう。それでは調査に
ならん」

「すみませんでした」

その言葉に素直に謝る騎士の男。

「すまないね。時間を取らせた」

「いえ、大丈夫ですよ、ツェルプストー辺境伯。お初にお目にかかります。レン・イグナイト・リ・クスタインです」

「ほう、あの男の子供か」

ツエルプストー辺境伯は少し驚いた様子だったが、あたかもレンの父を知っているような口ぶりだった。

「はい」

「しかし、なぜ、こんな所にいるのだ？ここはクスタイン領ではないのだ。それにあの過保護な母親がおまえを一人で外に出すとは思えないのだが？」

「基本的に両親は私のすることに干渉しませんので」

「そうか」

二人の間にしばしの沈黙が流れる。

「貴様本当に六歳か？」

ツエルプストー辺境伯の口から意外な言葉が出た。

「はい・・・そうですが」

「そう警戒するな。ただ私の娘と同じ歳だというのに、かなりしっかりしていたのモノでな。それよりも、この領で何をしていたのだ？ クスタイン家はこの領と関わりがあるのか？」

「いえ、一切ありません」

「なら――」

「一人の使用人が泣きながら領に帰りました。それで追いかけて参りました」

「ほう、使用人のためにか？ 危険を犯して一人で？」

「はい」

そう言いきったレンに対して周りにいた騎士達は全員、大笑いした。

しかし、それはバカにしている風な笑いではなく、そんな歳から良

くやるなというような笑いだった。

「すまん、すまん。それにしても貴族にそこまで思われるなんてその平民は、貴様の妾か？」

「確かに妾ですが………それ以上に家族です。家族を泣かす者は誰であろうと、戦います」

「それはあの森で二人の少女を失いかけたからか？」

「っ!？」

驚きを隠せない様子のレン。

「ああ、別に両家とも話してないぞ。ツェルプストーの諜報が優れているだけだ」

「………そうですか」

「それなら、今回の件と何か関係あるかもしれん。貴様にも話そう」

「旦那様!？」

そのツエルプストー辺境伯の言葉に周りにいた初老の騎士が声をあげた。

「よい。それに我が一族は愛に生きるのだ。愛のために幼いながらも女を追い掛けるなど応援したくなるではないか」

ツエルプストー辺境伯の言葉に黙る初老の騎士。

「我々がここににいる理由はな——」

○
○
○

ツエルプストー辺境伯と別れた後、レンはまたレイナーレの元へ向かうべく馬を走らせていた。

その様子はさつきほどよりも余裕がなく、必死つさを感じるモノだった。

レンの瞳にはやっと前方に人口三百人ほどが暮らしているであろう規模の村が見えて来ていた。

「旦那、あのあたりに馬を置いておけば誰からも見つからないと思いますよ」

レンに助言するラグナロクしかし、その声色は助言するようなものではなく。

自分の主を心配するような声色だった。

「それにしても、今のご時世の貴族は腐ってますね、旦那」

「……ああ。昔は違ったのか？」

「昔って言ってもブリミルの野郎が前の主様に喧嘩売ってた時ですけど、まあ、今よりは……あれ？その時貴族っていましたか？」

「いや、俺に聞かれても……」

「あはは、なんせ、六千年も眠ってたんでしょ？俺」

「ラグナロクの話しが正しかったら」

（やばいな……旦那、相当キレてる……異端の力が暴走しないといいけどな）

そう心配するしかないラグナロクだった。

レンが徒歩で村に到着すると、一番始めに目に入って来た光景は……

「おいおい、俺様にぶつかってきやがって、ここの村人は領主様の傭兵に対して扱いがひどすぎるんじゃないか？」

ニヤニヤした下品な男達、五人が一人の村人に対してイチャモンをつけていた。

「嬢ちゃん、なかなか可愛いな。そうだ。一日俺らに付き合ってくれて『この村』の金で俺達をもてなしてくれたら今回のことは多め

に見てあげよう……もちろん、しないと分かってるよね。
俺達は領主様に雇われてる傭兵だよ？」

「で……でも……あなた達が私にぶつかって……」

男達にイチャモンをつけられている女の子は尻持ちをついた状態で
瞳に涙を浮かべている。

周りから見守っている、いや周りで何もできずにいる村人達も歯を
食いしばっている。

いくら傭兵達くらいなら村人が一致団結すれば倒せるとはいえ、そ
の後ろにいるのは貴族でメイジの領主である。

反抗などしようものなら村ごと滅ぼされてしまう。

「……………これは」

レンに村に入ったら言葉を話さないように言われていたラグナロク
で、さえ、思わず言葉を漏らしてしまうほど状況は酷かった。

レンはおもむろに、傭兵達の男の方に歩いて行き。

目の前に立つ。

「なんだ？ガキ？」

そのまま、レンは傭兵の男にまっすぐ、突っ込み文字通りぶつかった。

「ああ？何しやがるガキ！！」

怒る傭兵を余所にレンは冷静に言い放つ。

「貴様、誰にモノを言っている。私は貴族だ。その貴族にぶつかったのだ。覚悟はできているだろうな？」

「な！？おまえがぶつかってきたんじゃないか！？」

「うるさいな。私は今『家族』を家畜並みの知能しかない豚に連れ去られた可能性があるから。イラついているんだ」

「なんだよ！？勝手な都合じゃねえか！？それに例えおまえが本当に貴族だとしても、ガキに俺達が負けるはずがねえだろが！！」

「……やってみるか？」

レンはラグナロクを抜き放つ。

「はは！！貴族の坊っちゃんが『魔法』を使わずに『剣』ですか？それは平民の俺達のためのモノですぜ！！貴族の坊っちゃんよりも俺達が使った方がいい」

五人の傭兵達の下品な笑い声が周りに響く。

「言いたいことはそれだけか？ラグナロク」

レンがラグナロクを呼んだ瞬間、黒い刀身が光だしその黒い刀身が砕けていく。

そして、綺麗な白銀の刀身が現れる。

「すげえ……あれを売れば、何日遊べるか……」

神聖な刀を見てもそんな下品なことしか考えられない傭兵達は本当にバカだった。

「……………旦那……………分かってると思いますが」

ラグナロクが小声でレンに話しかける。

「大丈夫。私は冷静だよ」

冷静ではなさそうなのでラグナロクが声をかけたのだが、それがかたくなに分かっていないレンだった。

もはや、色々なことへの怒りが強すぎてレンの顔は少し歪んでしまっている。

ゆっくりと前へ一步一步進むレン。

それを見てもまだ、傭兵達は呆然と立っている。

六メートル……………四メートル……………そして、三メートル。

そこでレンは止まる。

「私の勝ちだ」

レンの勝ち宣言と共に、傭兵達は何もない所を剣や槍で切ったり突いたりしだした。

その異常な光景をレンは見下した視線で村人達はまったく何が起きているか分からないと言った視線で見っていた。

「月読………旦那も抜け目ないですね。俺の本当の姿を見せたのは盗賊達へと月読をかけるためのブラフですか……」

またラグナロクが小声で言ってきた。

「ああ、そうだ。今、彼らは存在しない俺を切ったり突いたりして自分が優勢だと思っているよ」

レンは月読で目の前の傭兵達に『目の前にレンが突然現れる』幻覚を見せているのである。

もちろん、今のレンでは複数にそれも同時に幻覚を見せることは通常は不可能である。

例えそれが『異端』の能力であっても。

だから、レンは幻覚をかけるために傭兵達の心を揺さぶった。

ラグナロクの本当の姿を見せることによって、案の定、動揺しまくった盗賊達にレンは苦も無く幻覚をかけることができた。

そして、レンはラグナロクの刃を逆さにして峰の部分で盗賊達に斬りかかった。

もちろん、レンは自分の目の前にいる、と認識している傭兵達にとっては攻撃を違う方向から受けるとは思っていないので、レンの攻撃はあっさり決まり、五人共簡単に気絶する。

それを見ていた村人達は始め何が起きたか分かっていなかったが、レンが傭兵達を倒してくれたことが分かると次第に歓声が上がりはじめ。

そして、それを聞いて我に返った傭兵達に絡まっていた女の子は

「ありがとうございます!!」

地面に顔をつけるかのごとく土下座してレンに礼を述べた。

「大丈夫だから。私は『私に』無礼を働いたモノを貴族として斬っただけだから、問題ないよ」

厳密に言えば斬ったのではなく、峰で強打して気絶させたのだが。

そして、もちろん、レンが勝手に傭兵を斬ったのだから村人に責はない。

「それでも、何かお礼をさせてください!!」

「……それなら。レイナーレの家に案内してくれないか？」

「え？ レイナーレお姉ちゃんのこと？」

「ああ」

「…………レイナーレお姉ちゃんの知り合いの方なんですか？」

「そうだけど」

「レイナーレお姉ちゃんはカサイス子爵に……………」

「君はレイナーレの妹なのかい？」

「いえ、近所に住んでいて、よく遊んでもらってたんです」

「それで話を聞かせてもらえるかな？」

「……………はい。実はレイナーレお姉ちゃんの家は貧乏なんです。あ、レイナーレお姉ちゃんの家だけじゃなくて私達も貧乏なんですけど…………レイナーレお姉ちゃんの家はレイナーレお姉ちゃんの弟君が病気になってしまって…………子爵様に借金して薬を買わせていただいたのですけど…………子爵様が突然『金を今すぐ返せ、返せないなら娘をよこせ』と仰られたんです。昔、レイナーレお姉ちゃんは子爵様の目に止まった時は叔父さんがすぐにレイナーレお姉ちゃんをどこかの貴族様の所に奉公に出されて回避されたんですけど……………」

そこまで聞いてレンは納得した。

子爵からすれば、レイナーレを妾にしようと思っていたのだが、先に奉公に出されてしまつては貴族同士のしがらみなどがあるため迂闊に手を出せない。

しかし、子爵は諦めきれなかったのだろう。

そして、たまたまその時レイナーレの弟が病氣になつてしまつて、元からレイナーレを自分の妾にするために治療の金を貸したのだから。

「ありがとう。分かった、その金の代わりにレイナーレが子爵の妾になつたんだな？」

コクンと首を縦に振る女の子。

『普通』のメイドの話なら、金を子爵に返してまで自分の傍に置く貴族はいないだろう。

しかし、レンに・・・そうレンにとっては

「そんな僕のために……お姉ちゃんは!？」

不意にレンの後ろから小さな男の子の声が聞こえて来た。

そして、レンと女の子が見ると途端に泣きだしてしまった。

おそらくレイナーレの弟だろう。

周りの大人が慰めないのも本当のこのことから、どう慰めていいかわからないのだろう。

レンはゆっくり、レイナーレの弟らしき男のこの傍に寄ると、

「大丈夫、お姉ちゃんは私が助けるから安心して」

六歳の男の子が四歳位の男の子を慰める変な絵ずらになっているが、そのおかげでレイナーレの弟は泣きやんだ。

「グスン、ほんと？」

「ああ、大丈夫。私を信じて」

優しいそのレンの呟きに村人達は大人まで、何かを安心してしまった様子だった。

このハルゲニアでは、こんな光景がみられることはほとんどない。

こういう所でもレンは『異端』なのかもしれない。

レイナーレの弟が泣きやむのを確認してレンは近くにいた村人に聞き始めた。

「カサイス子爵の屋敷はどこにあるんですか？」

そんなレンの質問に皆、下を向いて答えない。

彼らは『自分』が教えてもしものことがカサイス子爵がもしも怒って『自分』が罰せられるのを恐れているのだ。

しかし、それは今のハルゲニアでは普通のことであり、平民と貴族との間にあるしがらみによって生じるモノであり決して彼らが悪いわけではない。

それが分かっているためレンも、これ以上しつこく言うことはしなかった。

「旦那……屋敷の場所は分かるんですか？ぐずぐずしてたら、こんな下郎を雇ってる子爵ですよ……レイナー嬢ちゃんの純潔が……刀の分際でこんなこと言うのは失礼かもしれません……俺もあの嬢ちゃんのことは気にしています。だから助けてやってください」

「……分かってる。何度も言うけど俺は家族は何が何でも守るよ」

「ありがとうございます」

村から見える青々しい平原を見つめながら考えていた。

どうやって、カサイス子爵の屋敷の場所を調べるかを、そして今の現状を。

（あの時、ツエルプストー辺境伯と共に行っていれば……でも、そうになったらこの子がこのバカな傭兵達にさらわれていただろうしな……はあ、あの時、転生前の日本のことは忘れて平和ボケした感覚捨ててをハルゲニアに合わせるつもりが、てんでできてない

な)

思考の海に入って少しした時だっただろうか。

突然、野次馬の一人が悲鳴を上げた。

正確には悲鳴に近い叫びを。

「し、子爵の馬車よ!？」

声のした方を見ると一人の村娘がレンが見ていた平原とは別の方向を指さしていた。

確かにその方向には、貴族が乗る馬車がゆっくりとこちらに近づいて来ている。

その周りに何人かの馬に乗った護衛がいるのだから間違いない。

恐怖する村人たちに対してレンは内心歓喜していた。

どうやって探しだそうかと考えていたのに逆に向こうから現れてく

れたのだ。

自分が主人公補正でもかかっているのではないかと思うほどに。

それからレンは、ゆっくりとこちらに向かって来る馬車を見つめていた。

確かな憎悪を込めて。

家の中に隠れようとしている村人には一切目をくれずに。

その姿はとても、六歳の子供には見えないだろう。

【INレイナーレ】

私は家族からの手紙を見た時から胸騒ぎがして仕方なかった。

だって……紙なんて高価なモノ貧乏な私の実家にはとてもじゃないけど買えないしろものだし……そんなお金があるならお腹いっぱい食べることに使うと思うから。

内容に目を通すと涙が出てきた。

だって……だって、レン様の傍にいてこんなに幸せなのに……。

その手紙には無情にも、カサイス子爵の妾になって欲しいというものだった。

実の親からこんなことを言われる日が来るなんて……本当に信じられなかったが内容を見ると仕方ないモノだった。

弟の命には代えられない。

だから、私は覚悟を決めることにした。

レン様に迷惑はかけられない。

でも……純潔だけは……純潔だけはレン様に捧げた
かった……。でも、レン様はまだ六歳だし……。

あの家族を苦しめるカサイス子爵なんかには捧げないといけないん
て……。それを考えると余計に涙が止まらなくなった。

なんで、アインハルト様やヴィヴィオ様のように普通にレン様の傍
にいらなかったのだろうか？

生まれた時から運がなかったのだろうか？

分かっているこれは嫉妬だ。

でも、どうしようもないじゃないですか？

溢れてくる涙を止める術なんて私には今ないし……。

でも、突然消えてしまったらレン様はきっと探しにきてしまう。

カサイス子爵なんかには純潔を奪われた状態でレン様に会うなんて……
……できない。

絶対に。

だから、私は唯一レン様から貰った紙に辞めることを書いてテーブルの上に置いて、屋敷を後にした。

手紙の話しでは早く行かないと殺されてしまうらしいので、私は馬を借りてカサイス子爵の屋敷まで走らせる。

本当は少しでも時間を稼ぎたかった。

こんな時、物語では王子様が現れて助けてくれる。

でも私はお姫様ではない。

。レン様はアインハルト様とヴィヴィオ様の王子様だから……。

もしかしたら、平民に生まれた時からこれは決まっていたことなのかな？

私は馬を走らせること二時間半、私はカサイス子爵の屋敷に着いた。

いつ見ても、私達の家とは違い豪華だ。

レン様の方が何倍もお金持ちのはずなのにカサイス子爵の屋敷の方が豪華ということは、それだけ私達から搾り取っている証拠だ。

門番に私の村の名前と名前を告げると早速、カサイス子爵の元に案内された。

今日から私は借金を返すためにカサイス子爵の全ての世話をするメイドになるそうだ。

そう・・・全てを。

涙を流すのを必死に我慢しているとカサイス子爵は人間とは思えない一言を言い放った。

「今からおまえの生まれた家に行くぞ。そこでおまえの両親の前でおまえの純潔をもらう」

私はもはや、涙を流せずに顔を青くすることしかできなかった。

だって・・・・・・・・そんな・・・・・・・・どこまで私を辱める気なの？

でも・・・・・・・・借金という枷があるから・・・・・・・・うんうん・・・・・・・・平民と貴族という壁があるから私は従うしかない。

従わなければそこに待っているのは家族全員の死だから。

せっかく弟の命が助かったのに・・・・・・・・それじゃあ、意味がない。

私はカサイス子爵に言われるがまま、メイド服を着てカサイス子爵と共に貴族用の馬車に乗り込む。

カサイス子爵は

「こんな豪華な馬車乗ったこともないだろう？」

と、下品に笑っていたけれど・・・・・・・・私はレン様と共にもっと豪華な馬車に乗ったことがあった。

しかも、あの時はウキウキ楽しい気持ちでいっぱいだったけど。

今は・・・・・・・・悲しいを通りこして虚しい。それだけだった。

馬車の中でも、カサイス子爵が何か話してくるけど・・・・・・・・何
も理解できなかった。

レン様との話しはいつも楽しくて面白いのに。

「おい、聞いているのか？私がどれだけこの領地のために頑張っているかを話してやっているというのに！！」

「す、すいません」

・・・・・・・・本当にそうなら、私達はこんなに苦しんで悲しむ必要はないと思う。

レン様の周りには笑顔があふれているのだから。

「まあ、良い。もうすぐ、村に着く。そこでやっとか」

そう言ってまた下品に笑うカサイス子爵。

もはや、私はこの男に憎悪以外の感情は抱かなくなりました。

神様……いえ、始祖様、私はあなた達を怨んで生きて行くことにします。

【END】

村の前にカサイス子爵の馬車が着いた時、広場に残っている平民はレンが助けた女の子とレイナーレの弟だけだった。

路地裏から広場の様子をうかがっている平民はいても、出て来ることはないだろう。

「ふん、いつ来ても活気のない村だな。これだから、税を納められない豚が多いのだ」

馬車から下りて来たのは三十代後半くらいのおっさんだった。

確かに彼が着ているモノは豪華で指につけている指輪はさぞかし値段の高いモノだと分かるがそれを、彼の体が全て台無しにしている。

贅肉だらけでしまりのない体。

下品な笑い方をするであろう顔。

平民を豚と呼ぶその言動。

そのカサイス子爵の後ろからレンのよく見知った顔が降りて来た。

「あ．．．．．」

そう小さく呟いたのは他でもないレイナーレだった。

その小さな呟きにカサイス子爵は気づかないようだったが、レンは確実に気づいた。

レイナーレが降りたのを確認するとカサイス子爵は周りを見渡す。

「な！？どういうことだ！？私の傭兵が！？」

一番に目に飛び込んで来たのはレンが倒した傭兵達だった。

そして、その贅肉だらけの体を醜く揺らしてレンの方へとズカズカと歩いて来た。

それをレンは冷めた瞳で見つめていた。

「おい、貴様！！これはどういうことだ！？」

「お初にお目にかかります。カサイス子爵。私はレン・イグナイト・リ・クスタイン。クスタイン家の長男でございます」

「ふん、私は貴様の名前を聞いているのではない！！これを説明しろと言っているのだ！！」

「これですか？ただ、クスタイン家の長男である私に無礼を働いた平民を粛清しただけですが？」

「これは私の傭兵だ！！こんな怪我をさせてタダで済むと思っているのか！！」

本来なら、逆にカサイス子爵は自分の監督責任で賠償金を支払えと言われても文句が言えない状況なはずなのに、子供だと思いバカなことを叫んだ。

「失礼ながら、カサイス子爵。あなたはクスタイン家長男である私に危害を加えようとした傭兵どもを雇っている？でしたら多額の賠償金を要求させていただきます」

「な！？バカなことを言うな！！」

「その上、あなたの横にいるのは私の妾です。それを無理矢理奪ったのですから、その分の賠償金も要求させていただきます。全ての領地を失うどころの話しだと思わないでくださいね」

「貴様！！何を言うのだ！！そんなことできるはずがないだろう！！」

「いえ、できます。あなたは今、クスタイン伯爵の息子に手を出しているんですよ？」

それを聞いてカサイス子爵は顔を歪めた。

今のゲルマニアでクスタイン伯爵の名前を知らない貴族はいない。

貴族の中では恥とされる自分が商売をすることを平民上がりだからやっただのだ。

事実問題、最初は皆バカにしていたが一年……三年……
……五年とする内に気づけばゲルマニアの市場の九割を仕切るようになったのだ。

そして、その妻の能力も凄まじくゲルマニアにはなかった制度をドンドン発案、実行していき他の古参の有力貴族でさえも無視できないほどの有力貴族になっていたのだ。

さらにその後ろにはゲルマニアでは古参のゼーゲブレヒト家がついている。

もはや、クスタイン家を敵に回せば、その領地の商売は周らなくなる。

そのクスタイン家の溺愛されていると噂される息子を怒らせ、あまつさえ、自分の傭兵が不敬を働いたのだ。

無事でいられるはずがない。

「き、貴様がクスタイン家の子息かどうかが怪しい……」

「横にいるレイナーレに聞いてみれば分かりますよ」

歪んだ顔でカサイス子爵はレイナーレの方を向くと、レイナーレは首を縦に振った。

完全に追い詰められたカサイス子爵は下をしばしば向いていたが突然空を見上げて叫んだ。

「そうだ！！なかったことにすればいいんだ！！このガキを殺してなかったことに！！」

そしてカサイス子爵は服の中に手を伸ばして杖を取り出す。

それを見たレンは素早くラグナロクを抜刀して身を低く屈めて呟く。

「一陣」

次の瞬間、レンはカサイス子爵まで一息に移動してカサイス子爵が出した杖を切り裂いた。

『一陣』、それは剣を持つ手に膨大な魔力を纏わせて相手が反応できない速度で切り裂く。

その速度を出す代償に腕の筋肉が硬直して少しの間動けなくなってしまうが。

カサイス子爵への脅しにはこれで十分だった。

「ひい!?!」

「貴様のようなクズ貴族がいるから、この世界は良くならないんだ。だから辛い思いをする平民が大勢いるんだよ」

自分の背の半分もない子供に恐怖するカサイス子爵は、滑稽以外の何物でもない。

あまりにも呆気なさすぎる、家畜子爵にレンはもはや、興味を失っていた。

「終わりました。出て来てください。ツェルプストー辺境伯」

レンのその言葉が広場に木霊すると路地裏より一人の男が出て来た。

燃えるような赤い髪を持った男が。

「いつから気づいていたのだ？」

「馬車が村に着く前に馬が五頭ほど近付いて来るのが見えましたから」

「そうか」

「ツェルプストー辺境伯、その様子だとカサイス子爵の屋敷は制圧したんですか？」

「ああ、制圧した。しかし肝心のカサイス子爵・・・いや、カサイスが屋敷にいなかったのだ貴殿のことにも気になったから、カサイスが向かった村に私も馬を走らせたというわけだ」

彼らの話しの内容が分からず、レイナーレとレンが助けた女の子とレイナーレの弟は首を傾げている。

そう、話しはレンがツエルプストー辺境伯と別れる少し前に戻る。

「我々がここににいる理由はな。カサイスが閣下の金を横領していたことが分かったのだ」

閣下とは、他国で言う『王』のことである。

ゲルマニアでは基本的に皇帝のことを閣下と呼ぶ。

「それで辺境伯ともあろう方がわざわざ出向いたのですか？」

ツエルプストー辺境伯の言葉を聞いたレンが苦笑する。

普通、辺境伯ほどの地位の人間が動くなどありえないことだ。

「なに、私も時には兵と共に仕事をしないと円滑な信頼関係は気づ

けないのさ」

「そうですか・・・それで話しは分かりました。私はこれから私の妾を取り戻す予定ですが、もしカサイス伯爵が私に危害を加えて来た場合、カサイス伯爵の賠償金として私にこの領地をいただけないでしょうか？」

「なぜだ？クスタイン家ほどの財力があれば、こんな領地はいらないだろう？」

カサイスのような下郎が納めていた領地のため経済や農作などは、ゲルマニアでも下から数えた方が早いほどだった。

そう、トリステイン王国と同じように破たんした内政だったのだ。

「私の妾の家族が住んでいる領地です、良くしたいと思うのは普通ではないですか？」

「アハハハ、貴殿は本当に面白いな。分かった、私が自ら閣下にそう言ってやろう」

「ありがとうございます」

「ふふ、本当に貴殿は面白い。我が家に招きたいほどにな」

「ありがたいお話ですが今は・・・」

「分かっておる。早く妾の元に行ってやれ」

「では失礼します」

そんなやりとりがあったのだ。

「貴殿の言った通りこの領地を貴殿に与えるように閣下に話しをしてみよう。時期クスタイン家当主に恩を売れるのだ。こちらとしてもメリットはあるさ。ただし、カサイスは私が連れて行くよ」

「はい、お願いします」

「では、また会おう」

そう言って辺境伯の後から出て来た数人の兵達がカサイスとカサイスの傭兵達を縛って連れて行った。

「あの……………」

そのやりとりを咄然として見ていたレイナーレはやっと、なんとかだが現状を理解した。

レンが助けてくれたという現状を。

「レイナーレ、また私の言いつけを破ったね。今度はどんな罰を与えようか？」

軽い口調で言い放つレン。

「嬢ちゃん、良かったな」

優しいお父さんのような声で言うラグナロク。

「……………あう……………ありがとうございます」

涙を押し殺してお礼を言うレイナーレ。

「大丈夫、レイナーレは俺の家族だ。だから守るよ」

その一言を聞いたレイナーレは瞳から大粒の涙を流し出した。

この日、レイナーレは、またレンの胸で泣くことになった。

そして、このやりとりを見ていた村人達の心には確かに異端の少年をを胸に刻み込むことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286o/>

降臨せし異端の王

2010年12月11日06時54分発行